

## ミール・アリーシールとウイグルのバフシ、

久保 一之

## はじめに

ミール・アリーシール Amīr Nizām al-dīn 'Alī-šīr (1441-1501) は、ティムール朝ヘラート宮廷の実力者として、また慈善家・学芸保護者として、さらにはナヴァーイー Navāyī を筆名とするきわめて高名なテュルク türk (トルコ) 詩人・文人として、政治・経済・文化の各分野で活躍した [Barthold; Bertel's; Sultan; 久保 1990; 同 1997b]。彼は、英主スルターン・フサイン Sulṭān Ḥusayn Mirzā (在位 1469-1506) や高名なシャイフ・ペルシア詩人のジャーミー Mawlānā Nūr al-dīn 'Abd al-raḥmān Jāmi (1414-1492) と並んで、首都ヘラートの繁栄を支え、かつこれを象徴する存在であった。その政治的・経済的実力の基盤は、何よりも君主スルターン・フサインとの特別な関係にあり、これは両者の家系間の関係を端を発していた [久保 1990: 21-24]。しかし、アリーシールの家系については不明な点が多く、そもそもテュルクであるにも拘らず、史料中、彼の名に血縁の帰属集団 (氏・部族) の名称が伴われることがない。本人の発言から、バルラスやアルラトなどの有力部族の出身ではないことだけが判明している [久保 1997b: 169-170]。はたして、アリーシールは、どのような範疇に属するテュルクとして誕生したのであろうか。

アリーシールの家系の帰属集団名に唯一言及する史料 *TR* (*Ta'riḥ-i Rašīdī*) によれば、「彼の家系 ('aṣl) はウイグルのバフシ (baḥšiyān-i üyğür) に属し、彼の父は Kičkina Baḥši と呼ばれていた」という<sup>1)</sup>。逸早くこの記事に注目して受け入れたのは、Z. V. Togan 氏である [ĪA: ALĪ ŠĪR, 349; Togan 1963: 5]。M. E. Subtelny 氏もこの記事を信頼して、アリーシールが世襲のアミールではなくバフシの家系に属したと判断し [Subtelny 1980: 799-800, 802]、安藤志朗氏も同じ記事に基づき、アリーシール (とその弟) をウイグル部に分類した [Ando: 198, 234 (n. 10)]。そして、両氏ともアリーシールの名の末尾に帰属集団名として「ウイグル」<sup>2)</sup> を付記している [Ando; Subtelny 2007]。しかし、*TR* の著者

1) 本稿におけるテュルク語 (チャガタイ語) 語句のローマ字転写の方針は、久保 2008: 253-255 に従うが、引用文献がペルシア語の場合はペルシア語式の転写もしくは両方式の併記とする。

2) 後述するようにティムール朝と同時代の遊牧テュルク・モンゴル系軍事諸集団の中に、他の著名な諸部族と同じく、「ウイグル」も存在した。しかし、本来「ウイグル」は部族名とは言えず、主に旧西ウイグル国領出身者およびその総体を指すから、チャガタイ、モグール、ウズベクなど

より時間的・空間的にアリーシールに近い同時代人たち、およびアリーシール自身は、アリーシールの家系と「ウイグル」や「バフシ」との関連に何ら言及していないのである。

筆者自身は以前アリーシールの家系について概括的な考察を加えた際、たとえ起源がウイグルのバフシであったとしても、アリーシールの誕生時には軍人の家系となっていたと結論づけた [久保 1990 : 24]。しかし、その後、先に重視した *Vaq.* (アリーシール作 *Vaqfiya*) のペルシア語訳テキストに欠落があったことが判明し、他方、文献利用の手だてが改善されて新たな考察の可能性が広がった。そこで本稿では、アリーシールおよびその家系と「ウイグルのバフシ」との関わりについて、十分に再検討し、当該の問題に対する、より明確な答えを見出すこととする。加えて、考察の過程を通じ、これまであまり注目されてこなかった、ティムール朝期テュルク文語文化の一側面をも明らかにする。

## I アリーシールに関する *TR* の記事の信憑性

### 1 アリーシールに関する *TR* の記事の脆弱性

まず、本稿「はじめに」で言及したアリーシールの家系に関する *TR* の記事を、アリーシールとその主君スルターン・フサインの関係に言及する部分も含めて、以下に紹介する。

彼の家系はウイグルのバフシ (*baḥšiyān-i üygür*) に属する。彼の父は *Kičkina Baḥši* と呼ばれ、ありふれた人物であった (*mardi būda 'alā al-rasm*)。ミール・アリーシールは幼い頃にミールザー・スルターン・フサインと知り合っていた。ミールザーが帝王となった時にミールザーに臣従し始めた。 [*TR* : 159 ; *TR/I* : 310]

アリーシールの父の名は *Kičkina Baḥši/ Kičkinā Baḥši* とされ<sup>3)</sup>、字義通り (*kičkinā <kičik+kinā*) に解すれば、「小バフシ」の意であろう<sup>4)</sup>。しかし、アリーシールに非常に近くその被保護者でもあったホーンダミール [久保 1990 : 40 (表 II-1) ; ユスポワ ; *Iusupova*] によれば、彼の父の名は *Amir Ğiyāš al-dīn Kīčkina* であり [*HS* : 71], *HS* とほぼ同時期の *LN* (1522-23 年完成)<sup>5)</sup> では *Amir Kīčkina* [*LN* : 133], *TR* よりやや後の *TS*

<sup>4)</sup> に匹敵する、かなり大きな集団の名称である。なお、ここに言うウイグルは、周知の通り、近代に命名された現ウイグル民族とは直接的なつながりを持たない [井原・梅村 : 426-427]。

3) *TR/I* では *KYČYNH* (كچين) と不正確な綴りになっている。この箇所以外でも *TR* と *TR/I* の間でテキストに若干の齟齬が見られるが、逐一は注記しない。他史料についても同様とする。

4) 続く「ありふれた人物であった」と訳した箇所について、*TR/E* は “official”, *TR/R* は “должностное лицо” という訳語を当て、「官人であった」という意味に解している [*TR/E* : 126 ; *TR/R* : 255]。これに対し *Izzat Sultan/ Sultan* 氏は、「ありふれた人々に属した (*оддий кишил-ардан эди/ был из простых людей*)」と訳し、父親の名も「小バフシ (*малый бахши*)」という意味に解している [*Sultan* : 28 ; *Sultan* : 21]。筆者は後者の解釈を支持する。

5) 序文でサファヴィー朝治下ヘラートの統治者 *Dürmiš Hān Šāmlū* (名目上の統治者は王子の *Sām Mirzā*) のワズィール *H'āja Ḥabībullāh Sāvajī* に謹呈したこと、終章にサファヴィー朝君主 *Šāh Ismā'il* (1 世) のワズィール *Mirzā Šāh Ḥusayn Isfahānī* への賛辞が記されている。前者のヘラ

(1550年頃完成)では *Kiçkina Bahādur* とされる [TS: 334]。幼き日のアリーシールがスルターン・フサインの父 *Sultān Ġiyāş al-dīn Mañşūr* (d. 1445/46) に見守られ、4歳の時フサインに付き従って初等学校に通い始めたというから [MA: 110-111; MA/F: 127b; 久保 1990: 23], この頃アリーシールの父はフサインの父の配下にあったと考えられる。そうすると君臣が同じ *Ġiyāş al-dīn* というラカブを有したことになり、「小さい (*kiçkinä*)」は「バフシ」ではなくラカブを修飾し、「小 *Ġiyāş al-dīn*」を意味するはずである<sup>6)</sup>。

また、アリーシールとスルターン・フサインの幼き日の出会いに言及しているが、両家系間の近しく確かな主従関係にまったく言及していない。ホーングミールによれば、アリーシールの祖先は「アミール・ティムール・キュレゲンの息子 [にしてスルターン・フサインの曾祖父] *Mirzä 'Umar Şayh Bahādur* の一族 (*düdmän*) の寵臣 (*maḥşüş*)」かつ「乳兄弟 (*kükaltäş/ kökaltäş*)」であり、代々「側近 (*muqarrab*)」の立場にあった [HS: 137; MA: 127; MA/F: 144a; 久保 1990: 22-23]。またアリーシール自身によれば、「この貧しき者 [=アリーシール] の一族 (*qawm-u-ḥayl*) は今上陛下 (*sultān-i šāḥib-qirān*) [=スルターン・フサイン] の古くからの下僕 (*bayrı qullar*) であり、世襲の下部 (*mawrüşī bandalar*) である」という [MN: 79; *Muk.*: XIII, 66; *Kul.*: II, 312a]。アリーシールとスルターン・フサインの関係について、TR は重要な点に言及していないことになる。

上の引用部以外でも、TR は、アリーシールの著作に関して「3つのテュルク詩集と1つのペルシア詩集があり、*Tadkirat al-awliyā'* (聖者伝) をテュルク語で著した」と誤りを犯し曖昧な認識を示している [TR: 159; TR/I: 310]。周知のごとく、アリーシールのテュルク詩集成 *Ḥazā'in al-ma'āni* は *Ĉār-dīvān* (四詩集) とも呼ばれ、それぞれ独自の題名を持つ4つの詩集から成り、聖者伝 NM はジャーミーによる聖者伝のテュルク語訳を主とする [菅原 2001: 51-52]。TR 執筆時に著者が BN, HS, RS, TS を利用したことが判明しており [間野: 232-234], アリーシールについても、ほぼ間違いなく BN の「テュルク詩が詠まれて以来、誰も彼ほど多くかつ良くは詠まなかった」という一節 [BN: 264-265] に基づいて、冒頭に「テュルク詩において彼以前も以後も彼ほど多くは誰も詠んでいない」と述べている [TR: 159; TR/I: 310]。しかし、BN はアリーシールの四詩集を題名まで正確に伝えているから、TR の誤りは BN を十分に参照し得なかったため生じたと考えられる。

TR の著者ミールザー・ハイダル *Mirzä Muḥammad Ḥaydar Duġlāt* は 1499/1500 年生まれで、ヘラートには、1505 年父に連れられ一時滞在したに過ぎず [間野 2001: 122-123,

ラート赴任は 1522 年 1 月であり、後者は 1523 年 4 月に没した [HS: 588, 596]。

6) 例えば、HS 中にバルフの “*sardār*” (司令官) で *Sultān 'Ali Kiçkina* という名の人物が登場するが [HS: 153], この人物名の場合も、“*kiçkina*” の語は同じ *Sultān 'Ali* という名の別人と区別する働きを持つと考えられる。ただし、アリーシール没後の 1506 年に作成されたワクフ文書において、アリーシールの父の名は *Amīr Jalāl al-dīn Kiçkina* とされている [Subtelny 2007: 264, 317]。スルターン・フサインの父の死後にラカブが変更されたのではないかと考えられる。

126], 1501年に没したアリーシールや当時のヘラートの情勢に直接通じているわけではない。また著者と同時代のヘラート関連記事に、信憑性の疑わしいものが含まれていることも、既に指摘されている<sup>7)</sup>。それでいてアリーシールの家系だけでなく、アリーシール自身についても、以下のように、*BN*, *HS*, *RS*, *TS* その他同時代史料にもアリーシール自身の著作にも記されていない、全く独自の情報が含まれていることも、また事実なのである。

## 2 アリーシールに関する *TR* の記事の独自性

アリーシールに関する *TR* の記事には、ほかにも独自の内容が含まれ、例えば「毎日彼の私有財産からの収益 (ḥāṣil-i amlāk) が 18,000 šāhruḥī であった」という [*TR*: 159; *TR/I*: 310]。これに類する記事としては、*TS* が「これらの建造物に定められたワクフ物件 (awqāf) は 500 tūmān-i kipikī [相当] である」 [*TS*: 904], *LN* が「毎日 75,000 dīnār がミールの財庫に入り、[その内] 15,000 が出費されていた」 [*LN*: 134] と伝えるが、そもそも貨幣の単位や数値が異なり、いずれも *TR* の上述記事の情報源とは見なせない。またアリーシールが「軍務 (sipahigari)」から退く際に「アミール職に伴う備え (asbāb-i imārat)」を委ねた相手に Amīr Bābā 'Alī の名が挙がっているが、類似する *LN* の記事にこの名は見られない。さらにペルシア詩人で *Šay.* の著者ビナーイー (d. 1512) に関する記事で、この詩人とアリーシールの、よく知られた確執にまつわる逸話を紹介するが、*BV* に見られるアクコユンルのスルターン・ヤアクーブに関わる逸話 [久保 1990: 43] のほか、他史料に見られない逸話も記されている [*TR*: 161-162; *TR/I*: 312-314]<sup>8)</sup>。

もちろん先行文献に忠実な叙述も見られる。例えば、高名なインドのペルシア詩人アミール・ホスロウの頌詩 (qaṣīda) *Baḥr al-abrār* にならってアリーシールが詠んだとされるペルシア語頌詩 (*TS*: 896-901 に全編所収) の開句 (matla') や、メッカ巡礼からの帰途にあったスーフイズム上の師ジャーミー宛にアリーシールが書き送ったとされるペルシア語のルバーイー [*TR*: 159; *TR/I*: 310] は、やや後の *TS* や *Mud.* にも引用されているが [*TS*: 337; *Mud.*: 148], 同じ由来書きで *MA* に収められたものと同じである [*MA*: 128; *MA/F*: 135b]。またアリーシールの唯一の「欠点 ('ayb)」として「繊細さのあまり怒っぼいこと (kaṣrat-i nāzūkī-yi zūd ranjīdan)」を挙げているが [*TR*: 160; *TR/I*: 311], これは疑いなく *BN* 中の「アリーシール・ベグは気分を害しやすいことで有名であった ('Alī-šīr Begning mizāji nāzūkluk bilā mašhūr dur)」という記事に基づいており [*BN*: 264], *BV* にも関連する逸話が収められている [*BV*: I, 400-402]。

そもそも *TR* は 2 部構成であり、第 1 部 (1546 年完成) が Tuḡlūq-Timūr Hān から 'Abd

7) 例えば、1510年サファヴィー朝のヘラート占領時におけるシャイフルイスラームの処刑に関して、かなり脚色された叙述が見られる [久保 1988: 151, 161 (注 8)]。

8) *LN* とは別の *MN* ペルシア語増補版においても、ビナーイーとアリーシールに関する独自の逸話が収められており (*LN* と同一刊本の 232-233 頁), その概略は *TS*: 167 にも見られる。

al-rašid Hān までのモグールのハンたち（旧東チャガタイ・ハン国王族）の歴史、第2部（1541/42年完成）が「著者〔原文では“banda”〕の状況と、スルターンたち・ハカンたち・ウズベク〔族〕・チャガタイ〔族〕その他に関して直接・間接に知った (dida va dānista) ことと、著者の同時代人たち〔に生じた〕出来事」である〔TR:5; TR/I:8〕。問題としている記事は第2部に取められ、アリーシールらは著者ミールザー・ハイダルの「同時代人」と見なされているが、前者の没年（1501）と後者の生年（1499/1500）から見て、情報源は文献もしくは伝聞に限られている。したがって、先行文献に見られない TR 独自の情報は、伝聞に基づいていると見なしてよいであろう。

TR の著者ミールザー・ハイダルの父は、血統や家柄ゆえ、1505年ヘラート滞在時に君主スルターン・フサインや王子たち、および大物アミールの Muḥammad Burūndūq Barlās [間野:407; 久保1997b:160-161] から丁重な扱いを受けた〔TR:167; TR/I:321〕。このときミールザー・ハイダル自身は幼すぎたとしても、父親とその周囲の人々は、没して聞かないアリーシールに関する多くの話題になじんだことであろう。その後ミールザー・ハイダルは、父親とは1508年に死別してしまうが、1509～1512年ヘラート事情に詳しい BN の著者バーブルに保護され、後には一時的にバーブルの息子たちに仕えた [間野:126-130]。バーブルが、先述のペルシア詩人ビナーイーほか多くのヘラート出身者やアリーシールに近い者と、面識・交渉を持ったことはよく知られている [久保1997a:29]。したがって、先に言及したビナーイーとアリーシールに関する逸話は、ビナーイー本人がバーブルとその周囲の者たちに伝えた可能性がある。ほかの記事においても、アリーシールに近い者やヘラート出身者による、信頼度の高い証言が情報源となっている可能性は十分にある。

TR 独自の情報のうち特に「ウイグルのバフシ」への言及を無視できない理由は、これだけではない。著者ミールザー・ハイダルによれば、TR 執筆の動機は「モグールのハカンたちの状況が完全に時の頁から消えてしまう」という危機感にあり〔TR:4; TR/I:6; 間野:140〕、あくまで「モグールのハカンたちの歴史」が「目的の根幹 (aṣl-i maqṣūd)」である〔TR:111〕。したがって TR は、アリーシールに関する他の同時代史料とは明らかに性格が異なり、その目的と著者の立場があいまって、中央アジアにおけるモンゴルの制度・慣習の詳しい記録を残している [間野:第2部第2章ほか]。このような特色を持つ TR ならばこそ「ウイグルのバフシ」への言及が見られる、と考えることも可能なのである。

以下、アリーシールの家系に関する TR の記事を念頭に置きつつ、そもそも「ウイグルのバフシ」とは何者か、モンゴル時代にまで遡って検討を開始する。

## II モンゴル帝国西方領土におけるウイグルのバフシ。

### 1 ウイグルのバフシ、の語義とウイグル、との関わり

「バフシ」の語源とされる漢語の「博士」は、仏教用語として7世紀半ばの漢訳仏典に見

られ「(宗教上の)教師」を意味し、8-9世紀までに大衆仏典において単なる「指導者・教師」を意味するようになる [Mair : 120]。この語の古テュルク音写 “BAQŠI/BAQŠĪ” についてソ連科学アカデミー刊『古テュルク語辞典』は、その語義を「教師・師匠 (учитель, наставник)」とし、第一の用例に『金光明最勝王経』ウイグル語訳を挙げる [Nadeliaev et al. : XXXV, 82]。このウイグル語訳仏典の翻訳者はバシュバリク出身のシンコ・シェリ都統なるウイグル僧で1022年の在世が確認される [小田 : 17-18]。「バフシ」は他のウイグル語訳仏典にも見られ、訳語としては「師・師匠」が妥当なようである [同 : 201-202]。このようにウイグルはモンゴル時代以前からこの語を使っていたが<sup>9)</sup>、モンゴルがこの語をウイグル語文献から取り上げ、あるいはチベット語を介して、改めて利用するようになったと考えられている [Mair : 120-121]<sup>10)</sup>。

モンゴル帝国西方領土において「ウイグル」と「バフシ」双方が見られる事例としては、イルハン朝のガザン・ハン (1271-1304/在位 1295-1304) に関して、代表的ペルシア語史書 *JT* に以下のような記事が存在する [cf. ドーソン : V, 318]。

イスラームの帝王 [=ガザン・ハン] の幼少期、[祖父の] アバカ・ハン が彼を自らの側に置いて、見守り保護されていた。偶像崇拜者 (but-parast) であるバフシたちを彼の従者・教師とされた。……彼の父祖はその宗派を信仰し、その道を歩んでいた。……インド・カシミール・ヒタイ<sup>11)</sup>・ウイグルの国々 (bilād) 出身の、偶像崇拜者たる様々なバフシにこの上ない尊敬や敬意が示され、あらゆる地に寺院 (but-ḥāna) が建てられ、多くの財貨が費やされた。 [*JT* : 1331-32]

バフシたちが幼き日のガザンの仏教教育を担当したことが判る。同史料にはガザンの養育係が「1人2人の baḥši-yi buzurg (大バフシ)」であったとする箇所もあり、“baḥši-yi/baḥši-u-ustād-i buzurg” は「漢語 (luḡat-i/ zabān-i Ḥitāy(i))」の「大師 (tāyši)」であるという [do. : 154, 599, 1253]。“baḥši-u-ustād-i buzurg” の “baḥši” と “ustād” (師) は明らかに類義語であり、実際仏教教育を担っているから、バフシの語義は先述ウイグル語文献の場合と異ならない。またウイグルやインド・カシミール・ヒタイ出身のバフシのほか、東方領土におけるチベット人バフシ、すなわちラマ僧の活躍もよく知られている。

上記引用部に見られる「ウイグル」はインド・カシミール・ヒタイに続くから、集団というより特定の地域を示唆していると考えられる。モンゴル時代の別のペルシア語史料には

9) ただし、『金光明最勝王経』ウイグル語訳の写本自体はかなり後代の成立である [小田 : 17; 濱田 1983]。なお、「バフシ」はウイグル仏典より古い碑文テュルク語にも “baḡsi” の形で現れ、その語義はやはり「師」であるという [Mair : 119]。

10) 「バフシ」については、M. F. Köprülü 執筆の *Ā* の項目 “BAḤŠI” が、目配りが利いていて事典項目以上の有用性を持ち、杉山・北川 : 429-432 も参考になる。なお、バフシの語源にはテュルク語説、サンスクリット説もある [*Ā* : BAḤŠI, 234]。

11) 「中国 (北部)」を示す ḤTA(Y)/ḤTA(Y) (خطای/ختای) の第1音節については、標準現代ペルシア語の Ḥa-ではなく、標準現代タジク語・ウズベク語に見られる Hi-を採用する。

「ウイグルの領域 (vilāyat-i uygūr)」<sup>12)</sup> あるいは「ウイグルの国 (bilād-i uygūr)」といった表現が見られ [TJ: I, 15, 31], 「タタルの居住地・故郷・揺籃の地」たる「はかり知れない広野」(つまりモンゴル高原)の西隣に位置する [do.: I, 15] というから、旧西ウイグル国領(天山地方東部・タリム盆地東北部)を指している。

以上から判断すると「ウイグルのバフシ」は、旧西ウイグル国領出身の仏教の師ということになる。13世紀末から14世紀初頭のジョチ・ウルスにおいても、偶像崇拜者たる「ウイグル」や「ウイグルのバフシ」の存在が確認できる [杉山・北川: 335-336, 338]。ところが、上記引用部の状況があてはまる時期(1270年代)にペルシア詩人 Pūr-i Bahā' Jāmī が詠んだ頌詩の中に次の有名な句がある [Minorsky: 263, 267-268]。

シャーマン (qām) たちを思わせる汝の卷毛はバフシの筆のように/汝の顔の上でウイグル文字 (hatt-i uyguri) を練習した [=卷毛が上下に美しく揺れた]<sup>13)</sup> [do.: 264, 275; TS: 316]

頌詩自体もモンゴルの術語・単語を盛り込んだ特異性ゆえに有名であり、上の句はバフシに関連して再三言及されてきた [ĪA: BAḤṢĪ, 233; Esin: 95; Sertkaya 1977: 19]。ここでバフシは「ウイグル文字を練習」する者、つまりウイグル文字文書記・書家と認識される<sup>14)</sup>。

この頌詩に先んじて TJ (1260年完成)の著者は「ウイグルの言語と文字 (zabān-u-hatt) がこの上ない学識・技芸 (faẓl-u-hunar) と見なされている」と述べ、別の箇所では「モンゴル語の技能 (hunar-i zabān-i muğūli) はウイグル文字と合わさり、今日これが学識・能力そのもの (h'ud-i faẓl-u-kifāyat) である」と断言している [TJ: I, 4, II, 260]。実際モンゴル帝国西方領土においてウイグル文字表記モンゴル語が広く用いられ、ジョチ・ウルスやチャガタイ・ハン国での使用例もある [Grigor'ev 1978: 8-9]。特にジョチ・ウルスでは1380年(トクタミシュの即位)までウイグル文字表記モンゴル語が公用文章語であったとされ [do. 1981: 89], 確認できる書記の名には「バフシ」の語が伴われている [do. 2004: 52, 70, 114]。イルハン朝では、13世紀後半から14世紀初頭のフランス王やローマ教皇に宛てた親書のほか、国内向け文書もウイグル文字表記モンゴル語で記されており [佐口: 197-211, 442; Cleaves], アナトリアですら1272年のワクフ文書の一部にウイグル文字表記モンゴル語が見られる [Sertkaya 1974: 182]。ジョチ・ウルスの場合と同じくイルハン朝においても、バフシがウイグル文字文書の作成に従事したと考えられる。

12) “vilāyat”は「地方・州(大都市を中心とする行政区)」という語義でよく用いられるが、本来抽象名詞で「統治・支配」を意味する。ここでは支配・統治する領域を指すと考えられる。

13) この句 (qāmān-i ṭurrahā-yi tu čün kilk-i baḥṣiyān/ kardand mašq bar ruḥ-i tū hatt-i uyguri) の韻律は Muẓārī 体 (---/---/---/---) である。ただし、最後の単語の綴りは YĠVRY (اوغوری) であり、本来なら uyguri ではなく uygūri (---) と読むべきである。

14) シャーマンの喩えもバフシと関連しており、バフシとシャーマニズムの密接な関係は、タントラ派のウイグル仏僧もバフシと呼ばれたことに由来するようである。壁画においてタントラ派仏僧も「バフシ」と呼ばれていること、ウイグルのタントラ派バフシの儀礼がテュルク系シャーマニズムと密接な関係にあることなどが、既に指摘されている [Esin: 89-93, 96-100]。

## 2 モンゴル語命令文書記としての‘バフシ’。

ウイグル文字文書記というバフシの役割は、ジャライル朝下で著された *DK* (1366 年完成) によって確認される。この公文書例集には「バフシたちに対するモンゴル語命令文書作成 (*kitābat-i aḥkām-i muḡūli*) の委任について」と題する一節があり、任命書 3 例が収められ、被任命者全員の名に「バフシ」の語が伴われているのである [*DK*: 39-46]<sup>15)</sup>。

上記の業務に従事する者は「モンゴル語命令文書記 (*kātib/ bitikči*<sup>16)</sup>)」あるいは「モンゴル文書記 (*kātib-i muḡūli-nivis*)」と呼ばれており [*do.*: 42, 44], その必要性については「平安の都バグダードとその他アラブ=イラク諸都市にはアラビア語, アジャム人 [=イラン系] 諸集団とジバル諸都市とファールス諸地域にはペルシア語で命令が出されたが, モンゴルとテュルクの諸集団 (*ṭavā'if-i muḡūlān-u-atrāk*) にも, 彼らの理解が容易となるよう, 彼らの言葉と文字で命令を送ることが必要となった」と説明される [*do.*: 40]。命令を受ける「モンゴルとテュルクの諸集団」は「万人隊・千人隊・百人隊のアミールたちと, 兵士や遊牧民から成るモンゴル・テュルク集団 (*jamā'at-i muḡūlān-u-atrāk*)」と表現される [*do.*: 45]。標題に「モンゴル語命令文」とあるから「彼らの言葉と文字」のうち「言葉」はモンゴル語であり, 「文字」は, 後述するようにティムール朝後半期ですらウイグル文字を「モンゴル文字」と呼んだから, 間違いなくウイグル文字である。

被任命者の職務内容は「下書きにアミールたちとワズィールたちのしるし (*parvānajāt*) を得た後, 慎重に注意深く清書に着手し, 用心を重ね, ウルカ・万人隊・千人隊・百人隊のアミール職<sup>17)</sup>やその他すべての裁定に関する勅命 (*aḥkām-i yarliḡhā*) の内容を, 要を得た簡潔な表現で紙面に記録する」ことである [*do.*: 41]。要するに, 「アミールたちとワズィールたち」の承認の下に, 遊牧テュルク・モンゴル系諸集団に対する様々な詔勅の文書化, それも下書と清書の両方を担当する, 行政書記の職務であったと言える。

任命書 3 例の中で「バフシ」と同義に近い類義語として, 先述 (注 16) の “*bitikči*” に加えて “*muḡūli-nivis*” (モンゴル文書記) も用いられている [*do.*: 40-41]。それでいて 3 人の被任命者の名は, *Ūrūk*, *Ṭaḡāy*, *Qutluq Būqā* といずれもテュルク系である [*do.*: 40, 42-43, 45]。ムスリム・非ムスリムの別は不明であるが, イルハン朝期のウイグル文字表記モンゴル語テキストにアラビア語・ペルシア語の固有名詞や術語が散見され [Cleaves], バフシたちはイラン・イスラーム文化になじみを深めつつあったと考えられる。

元来仏教の師を意味する「バフシ」がウイグル文字文書記を指すようになったのは, モン

15) これらの任命書例の存在は, *ĪA*: BAHŞI, 235 で指摘されている。

16) イルハン朝期の *bitikči/ bitikči* (モンゴル語で *bičigeči*) の職務としては, 税収支の記録, 勅令・支払命令書の作成, 租税台帳の作成などが挙げられる [本田: 246, 269, 278, 303]。なお, モンゴルのイラン統治初期にウイグル人 *bitikči* が活躍してイラン総督となるが, 大 (*uluḡ*) *bitikči* 職はワズィール職と同一視され, タジク系のホーラズム出身者たちがこの職についた [同: 106-112, 121-122]。

17) ウルカ・アミールとトマン (万人隊)・アミールについては本田: 第 2 章第 6 節を参照されたい。



ゴル時代当初ウイグル文字の読書きに通じたウイグル仏僧が、文字教育や書記業務に従事したことによると考えられる<sup>18)</sup>。したがって、この語義・役割の変化・多様化が、早くにあてはまったのは「ウイグルのバフシ」に限られると考えるべきであろう。

先述のように仏教教育を受けた少年ガザンは短期間で「バフシたる方法 (šiva-yi baḥšigari) に極めて熟練した」とされるが [JT: 1254], ここに言う “baḥšigari” (バフシたること/バフシのつとめ) は、ウイグル文字の読書きを含んだとしても、基本は仏僧としての学識を備えることである。しかし、ティムール朝期のモンゴル時代史叙述において、オゴデイが「オイラト部に属する Amir Argūn を、彼がバフシたることを学び書記 (bitikçi) たちの列に加わった後、[イラン総督] Kurguz の事情調査のためホラーサーンに派遣した」という記事が見られ [ZN: 64a; cf. 本田: 112, 116], 「バフシたること」が「(行政) 書記」たることを意味している。ただし、この場合バフシとなったのはウイグルではない。

チンギス・ハンは自分の子供たちや「モンゴルの幼子たち (küdakān-i muḡūlān) にウイグル人たちからウイグル文字を学ばせた」と伝えられる [TJ: I, 17; ドーソン: I, 78]。それから随分時代は下るが、先述 DK において、ヤルグのアミール (モンゴル法廷長官) の被任命者 Bayān-Timūr Baḥšī は、その名に「バフシ」の語を伴うが、「モンゴルのアミール」とされる [DK: 33]。扱う言語がモンゴル語である以上、モンゴル系バフシの存在は驚くに値しないが、モンゴル系どころか、バフシの中には、モンゴルの侵攻以前から先祖代々 (おそらくイラン系の) ムスリム定住民ではなかったかと思われる者もいる<sup>19)</sup>。ウイグル文字表記モンゴル文の読書きに熟練し、行政書記としての技能を身につけていれば、出自・系統はあまり問題にされなかったのであろう。

このような状況下テュルク文語も命脈を保っており、1310年ホーラズムで Rabḡūzī が *Qīṣaṣ al-anbiyā'* を完成し、1326年にはアナトリアのワクフ文書の一部にウイグル文字表記テュルク語テキストが記された [Sertkaya 1974: 181-82]。またジョチ・ウルスでは、ウイグル文字表記テュルク語がロシア語とモンゴル語の「仲介言語の役割 (роль языка-посредника)」を果たしていたが [Grigor'ev 1981: 89], ティムールの同時代人トクタミシュの即位 (1380年) 以降ウイグル文字表記テュルク語が公文書に用いられ始め、主となるウイグル文字文の下にアラビア文字文が併記された文書 (1397年) も作成された [Radlov]。

18) モンゴルは当初からウイグルの優れた人材を登用した [井原・梅村: 393-394]。なお、バフシが書記を指すこととガザン・ハンによる廃仏 (1295年) を関連付ける見方もあるが、バフシは廃仏前からウイグル文字文書記をも指し (既述)、廃仏後も仏僧の語義は失われていない (後述)。

19) 1324年イルハン朝下のマルティンで TJ の写本末尾にウイグル文字表記テュルク語韻文3行とウイグル文字表記モンゴル語韻文2行 (さらにアラブ詩 1bayt とペルシア詩 2bayt) を書き残した人物の名 Muḥammad b. 'Umar b. Ḥasan b. Maḥmūd b. 'Abd al-'aziz al-Samarqandī は先祖代々のムスリム定住民を思わせるが、同時に Muḥammad Baḥšī の名でも知られていた [de Rachewiltz: 282-83; Gandjei 1970: 53]。この人物は多言語使用詩人ではなく「単なるバフシ」であったらしい [Gandjei 1970: 56]。なお、先述ホーラズム出身の大 bitikiçi (注16) にもウイグル文字とモンゴル語に精通した者がいたという [本田: 122]。

### Ⅲ ティムール朝における「ウイグルのバフシ」

#### Ⅰ ティムールに関する記録と「ウイグルのバフシ」

ティムール朝期に入ると「ウイグルのバフシ」が代表的史書 *ZN* に登場する。王朝の祖アミール・ティムール（在位 1370-1405）に関する記録について言及する箇所である。

サーヒブ・キラーン陛下 [=ティムール] には、遠征時でも滞留時でも常時サイド・ウラマー・法学者から成るターバンの主たちや、ウイグルのバフシたちとペルシアの書記たち (*dabirān-i Furs*) から成る学識者たち (*ahl-i faẓl-u-dāniš*) が付き従っており、その一部の者たちが、裁定を伝える [陛下の] 命令に従い、常に、かの陛下が言動に発したのものや、王権・宗教・国家の柱石の状況に生じたものすべてを確かめ、この上なく努力して書き記していた。 [*ZN*: 90b]

ここでは「ウイグルのバフシ」は「ペルシアの書記」つまりイラン系官僚・文人と同じく「学識者」と見なされ、ティムールの言動や当時の政治状況の記録に従事していた。同史料に「トルキスタンのバフシたちと盛運伴うムンシーたちがテュルク語で雑然と無秩序に書き連ねていた、かの陛下 [=ティムール] の行為や状況」 [*do.*: 7b] ともあるから、「テュルク語」を用いる「トルキスタンのバフシ」が、「ウイグルのバフシ」と同じ役割を果たしており、両者の区別は曖昧である。ここで言う「トルキスタン」はティムール朝本領のマーワランナフルをも含み<sup>20)</sup>、おそらく、ジョチ・ウルスや旧チャガタイ・ハン国の領域を漠然と広く指している。なお、「ムンシー」とは公・私文書の起草を担う者であり、ここでは「テュルク語」で著述しているから、「バフシ」と厳密には区別されていない。

さらにティムール史編纂に関し、「全領土」から集められた「テュルク語・ペルシア語の韻文・散文の [ティムールに関する] 上述諸書」について、「テュルク語に通じたバフシたち (*baḥšiyān-i turki-dān*) とペルシア語に通じた者たち (*suḥan-dānān-i fārsi-zabān*) が書冊の1つ1つを読み、各々の出来事について、それが生じた時に居合わせた者たちが、その目で見たと通りに上奏した」という [*do.*: 90b-91a]。おそらく「テュルク語に通じたバフシ」は「ウイグルのバフシ」や「トルキスタンのバフシ」と厳密には区別されないであろう。また同書中、人類の創造に関して「ヒタイとチーンの手たち、テュルクのバフシたち、ファールスの学者たち (*ulamā*)、インドの賢者たち (*zīrakān*)」が列挙され、先に見た「バフシ」の学識者という性格を確認できる箇所がある [*do.*: 9b]。「テュルクのバフシ」はテュルク語の読書きとテュルク語文献に通じた学識者でもあったと考えられる。

以上のように「ウイグルのバフシ」の類義表現は、「トルキスタンのバフシ」、「テュルク

20) 本来「トルキスタン」はシル河より北を指すが、古くはフェルドウスイーの *Šāh-nāma* に見られるように、アム河以北を指す「トゥラン *Tūrān*」と区別なく使われる場合もある。この点については、口頭発表「中央アジアから見た歴史的イラン世界 —— *Īrān-zamīn* と *Tūrān-zamīn* ——」(2001年11月23日東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) で述べたことがある。なお、「トルキスタン」が都市を指す場合は *Yassī* (現トルキスタン市) のことである。

語に通じたバフシ]、「テュルクのバフシ」であり、テュルク語で著述するムンシー、あるいはテュルク語・テュルク語文献に通じた学識者とも言える。*Mu'izz* のティムール朝王族の臣下のリストにおいて「テュルクの書記たち (nivisandagān-i turk)」とされる者 35 名のうち過半数の 18 名は、その名にバフシの語を伴い、アブーサイド (在位 1451-69) の子 Aḥmad の項では「テュルクの書記たち」の代りに「バフシたち (baḥṣiyān)」という見出しが付されており [*Mu'izz*: 154a], 両者に厳密な区別はない。またアブーサイドの「テュルクの書記」の 1 人は Mawlānā Aḥmad Baḥṣī という名で “mawlānā” というウラマーの称号を持ち [do.: 152b], シャールフ (在位 1409-1447) の子 Bāysungur の孫 Ibrāhim に Mawlānā Baḥṣī という名のサドル (宗務長官) がいる [do.: 145a]。テュルクの学識者たるバフシが、イスラーム諸学をも修める場合が増えてきたためと考えられる。

## 2 ティムール朝におけるウイグル文字使用の広がり

ティムールの周辺にモンゴル語話者の存在が確認され [Togan 1962: 70], また 15 世紀後半から 16 世紀初頭のマーワランナフルかホラーサーンで作成されたと思しき『五族譜』写本にすらウイグル文字表記モンゴル語が見られる [do.: 68-69]。しかし、ティムールの下ではテュルク語がペルシア語と並んで公用文章語の地位を確立し、ウイグル文字で記されていた。Ibn 'Arab-šāh は「チャガタイ人たち (al-jagatāy)」が「モンゴル書体 (qalam al-muḡūli) として有名な、ウイグルと呼ばれる書体」を用いていると伝え、「彼らの間でこの文字 (ḥaṭṭ) の熟練者 (māhir) がいなくなることはない。なぜなら [この文字が] 糧食の鍵 (miftāḥ al-rizq) だからである」とその重要性を説明する [AM: 477, 479; AM/E: 321-322]<sup>21)</sup>。確認できる事例では 1391 年 4 月 29 日作の石刻文にウイグル文字表記テュルク語が見られ [Poppe 1940; Sertkaya 1977: 7-8], マムルーク朝スルタンへの書簡もウイグル文字表記テュルク語であったようである [Sertkaya 1977: 8]。

ティムールの子シャールフの治世 (1409-1447) に関しても、シャールフの「命令や指令 (aḥkām va amṣila)」がテュルク語とペルシア語の両方で発せられていたことが確認でき [Matla': 834; RJ: II, 213], ウイグル文字表記テュルク語のシャールフの勅令 (1422 年) が現存する [Deny; 小野 2006]。残念ながら、これ以外のティムール朝期ウイグル文字表記テュルク語文書としては、アブーサイドの外交書簡 (1468 年) [小野 2002] と、アブーサイドの息子にしてフェルガーナの統治者ウマル・シャイフ<sup>22)</sup> の命令書 (1469 年) [Melioranskii] が残っているに過ぎない。しかし、シャールフ時代にはヤズド、ヘラート、

21) この記事の存在は Subtelny 2007: 40, n. 114 で指摘されている。なお、クラヴィホもティムールのもとに数人のモンゴル文字文書記がいたと伝えるが、モンゴル文字がアム河以北の「サマルカンド国」つまりチャガタイ族の根拠地のみで用いられると誤解している [Clavijo: 99]。

22) このウマル・シャイフは、BN の著者にしてムガル朝の始祖バーブルの父であり、第 I 章第 1 節で言及したティムールの子ウマル・シャイフとは別人である。

サマルカンドにおいてムスリム文献のウイグル文字表記テュルク語写本が作成され、書写人4名全員がムスリム名を持ち、うち2人 (Mansūr Baḥṣī と Abū-Mālik Baḥṣī) の名に「バフシ」の語が伴われている [Sertkaya 1974 : 180-81]<sup>23)</sup>。美しいウイグル文字の記されたこれらの写本は、バフシと呼ばれた者たちがムスリムとなってもウイグル文字の使用を続け、行政書記としてだけでなく能書家としても活躍したことの証となっている。また、ティムール朝末期 (1488 年) 作成のウイグル文字表記テュルク語写本も存在し [Gandjei 1964]、ティムール朝全期にわたってウイグル文字が使われ続けたと考えられる [cf. 菅原 2007 : 1-2]。当時、ウイグル文字使用の広がり自体はティムール朝の支配領域をはるかに越えており、モンゴル時代とさほど変らなかった可能性がある。

例えば「大明皇帝 (Dāy-Ming Pādšāh)」からシャールフに宛てられた、親書、贈物の目録、通行証という3種の「文書 (maktüb)」は、いずれもアラビア文字・ペルシア語、「ウイグル人たちの文字であるモンゴル文字」・テュルク語、漢字・漢語という3種の文字・言語で、同じ内容のものが3通用意されていたという [ZT : 461, 699 ; 小野 2010 : 280]。またシャールフは Šayḥ Muḥammad Baḥṣī なる人物、ウルグベグは Muḥammad Baḥṣī/Baḥṣī Malik なる人物を明に派遣した [ZT : 414, 819, 841 ; 小野 2010 : 278, 299, 312]。これは中国においてウイグル文字表記テュルク語が十分に解されていた証であり、この状況には、モンゴル時代以前から確認される「ウイグル=ネットワーク」[森安 1997] が深い関わりを持つ可能性がある。西方においても15世紀後半のイスタンブルで多くのテュルク語文献がウイグル文字で書写され (注 23)、さらに1439年はるかイタリアのフィレンツェで記されたウイグル文字表記テュルク文が現存する [Sertkaya 1974 : 180 ; Poppe 1965]。

### 3 ティムール朝における「バフシ」の職務

ティムール朝期能書家としても活躍したバフシは、行政書記として、詔勅だけでなく様々なウイグル文字表記公文書の作成に従事したと考えられる。15世紀初めの「チャガタイ人たちは「彼らの印書き (tavāqi)・規定 (marāsīm)・布告 (manāšir)・書簡 (makātīb)・帳簿 (dafatir)・封印 (maḥātim)・史書・詩・物語・伝承・証書 (sijillāt)・経典 (asfār)」ほか「ディーワーンの業務やチンギス・ハンの慣習 (tūrāt) に属する全てのこと」にウイグル文字を用いていたという [AM : 479 ; AM/E : 321]。ティムール朝史書における稀な事例では、1461/62年ジャライル部に「手当 (ulūfa) とソユルガルを定める」ことになった

23) ほかに作成年・地不明のウイグル文字表記テュルク語写本の書写人に 'Alī Šāh Baḥṣī なる人物がおり [Sertkaya 1974 : 181]、また Šayḥzāda 'Abd al-razzāq Baḥṣī なる人物は、15世紀後半のイスタンブルで多くのテュルク語文献をウイグル文字で書写した [do. : 190-192 ; 小野 2000 : 156-158]。なお、後者は幾つか詩の中で自らを「トルキスタン出身の (turkistāni) バフシ」と呼び、またサマルカンドへの郷愁をつづる詩を詠んだ [A. G. Sertkaya 2004 : 117-118, 121]。

時、「バフシたちがジャライルの人々の s̄an と ḥilya を取り上げ (girifta), 数日それについて話し合った」[*Matla'*: 905] とされ、「バフシたちと bitikči たちが彼らの s̄an と ḥilya を書いた」[*RJ*: II, 259] とする史料もある。

“s̄an” は本来テュルク語の単語 san で「数えること」を意味し、「観閲」の意でよく用いられる。サファヴィー朝末期の行政手引書 *TM* において、矢筒士・奴隷軍人・銃士・砲兵・その他（鷹匠・門兵など）の各集団専任のワズィールの職務に、「観閲の日」に各集団の “nushajāt-i s̄an”（観閲文書）を読み上げることが含まれる [*TM*: 72-76/ f. 59b-60a, 61b, 63a, 65a, 66b-67a]。読み上げるものは、正確には “nushajāt-i s̄an va qadr-i tiyül-u-mavājib-u-hamasāla-u-nafari” とされ、おそらく “nushajāt-i s̄an” は nushajāt-i “qadr-i tiyül-u-mavājib-u-hamasāla-u-nafari”（封土・俸給・年給・個人給の額を記録した文書）とほぼ同義であり、“s̄an” はその省略形であろう。一方 “ḥilya” は、F. Steingass 編 *A Comprehensive Persian-English Dictionary* によれば “ḥilya-nāma”（登録簿）の省略形と考えられる。

この例から類推すると、バフシはモンゴル時代末期の状況で確認したように、遊牧テュルク・モンゴル系軍事諸集団（「ヤサの民」[久保 1997b: 152-153, 159]）に関わる様々な公文書の作成を担当し、その職務は俸給・資産など財務の領域をも含んでいた。近接する時代・地域におけるバフシの職務の事例は、ティムール朝滅亡後のバーブル政権に見られる。君主が「褒賞 (jildū/jildū) の約束」をするとき、褒賞とその受取人を「帳簿に登録する (dar dafātir ṣabt farmāyand)」よう命ぜられ [*TR*: 223; *TR/I*: 399]、都市征服の際に財務官やアミールたちとともに「財宝庫の管理」に任じられた [*BN*: 331-332]。また遠征中の渡河に際して、財務官やアミールたちとともに「全兵士の名前を 1 人ずつ書き記して全体の数を確かめること」が命ぜられ [do.: 407]、軍事行動を起こす際には、トヴァチやヤサウルを派遣して「軍や兵の配列・整列」についての命令を伝えた [do.: 516]。

他方でバーブルは、モグールが「外科医 (jarrāh)」をバフシと呼ぶとも証言している [do.: 49; *BN/J*: 注 402]。*Mu'izz* において「テュルクの書記」とされる者の多くがムスリム名の持ち主であったが、シャルフ時代でもバフシから仏僧（仏教の修行僧）の語義は失われておらず [*ZT*: 832, 835; 小野 2010: 306, 308, 334-335 (注 25)]、その後のモンゴルにおいて baḡsi/ barm は相変わらず読書きの師たる仏僧を意味した [ウラヂミルトソフ: 423-424, 注 3]。18 世紀半ばのチャガタイ語=ペルシア語辞典によればバフシは「書記 (nivisanda)・書記官 (dabir)・朗唱家 (ḥʿānanda)・外科医」であり [*San.*: 119b]、中央アジアのテュルク諸語に見られるバフシの語義には、師・仏教の識者・書記以外に、シャーマン、香具師、占い師、魔術師、医師、歌手、楽士など実に様々なものがある [Mair: 122]。

したがって、行政書記（および能書家）としてのバフシは、広く「バフシ」と呼ばれた人々の内の限られた集団に過ぎなかったと考えるべきであろう。*Mu'izz* において、名に「バフシ」の語を伴う者に帰属集団名が付記されている例は非常に少ないが、スルターン・

フサイン麾下の「テュルクの書記」9人の内3人の名に“Baḥsī(-yi) Üygür”<sup>24)</sup>という語句が伴われている [Mu'izz : 159a]<sup>25)</sup>。決して目立つ比率ではないが、ウイグル以外の帰属集団名を伴う例は、シャルフの子 Ibrāhīm Sulṭān 麾下の Ūzbig/ Ōzbeḡ Baḥsī のみであり、しかもこの人物は「テュルクの書記」ではなく「主馬官 (aḥtāci)」である [do. : 142b]。

もともと、能書家としてのバフシに限れば、モンゴル時代でも確認されたように (注19)、そもそもテュルク系と見なし難い者が活躍している。1444年サマルカンド作成のウイグル文字表記テュルク語写本の書写人の名は Zayn al-'ābidīn b. Sulṭān Baḥt al-Jurjānī al-Ḥusaynī であり、ムスリム定住民の出身地・居住地を示すニスバ Jurjānī を伴うばかりか、サイドとしての家系名 Ḥusaynī をも伴っている [AH : 23, LXII (facsimile)]<sup>26)</sup>。さらに、シリア生れのアラブ人 Ibn 'Arab-šāh が少年時代にサマルカンドでウイグル文字を学び、その読書きに熟練していたことも、ここで付言しておく必要がある [AM : 23]。

#### 4 アリーシールの著作に見られる「ウイグルのバフシ」

アリーシールの著作を主な対象とするチャガタイ語=オスマン語辞典は「バフシ」の語義を「トルキスタンのハンたちの、ペルシア語を全く解さない書記」とする [Luḡāt : 575]。この語義は、おそらく、モンゴル時代初期の状況に依っている。アリーシール自身は、自らの家系とウイグルやバフシとの関わりについて何も記していないが、その著作の中で「ウイグルのバフシ」に言及している。彼は即位後のスルターン・フサインの下で「職位 (manṣab)」を得て「職務 ('amal)」に従事する者の (母) 集団として、サイド・学職者・カーディー・ウラマーに続き、以下の諸集団を列挙する。(ただし、アリーシールは自らの仕官事情を別に記しており、彼自身がいずれかの集団に属した可能性は小さい。)

ティムール家に生まれた王子 (taymūri-nizād šahzāda) たちやバルラスに属する貴人 (barlāsī-nihād āzāda) たち、アルラトの名を持つ上席の者 (arlatī-ismlik šadrnišin) たちやタルハンの慣習を持つ華々しい者 (tarḥānī-rasmlik 'ayshguzin) たち、キヤトの血統に属する傑出した者 (qiyat-nasabliq muta'ayyin) たちやコングラトの系統に属する有力な者 (qonqirat-ḥasabliq mutamakkin) たち、ウイグルの特性を持つ (üygürī-šifāt) バフシたちやウイグル集団に属する良き者 (uyḡur-jirgālik yaḥsī) たち、不毛の荒野で献身的行為を為した警護兵 (jāndār) たち<sup>27)</sup>や古えの

24) Togan と Esin は Mu'izz に登場する「ウイグルのバフシ」2人 (Maḥmūd : Ḥājjī Muḥammad) を著名画家 (Maḥmūd Muḍahhib ; Ḥājjī Muḥammad) と同一視しているが [Togan 1963 : 15 ; Esin : 81-83]、同名という以外に根拠が見当たらず、この見解を支持することはできない。

25) このほか Mu'izz では Dawlat-šāh Baḥsī とされている [Mu'izz : 97a] ティムール麾下の有力アミールの名を、ZNにおいて Dawlat-šāh Baḥsī Uyḡür と記した箇所がある [ZN : 135a]。

26) AHの存在については井谷綱造氏のご教示を得た。ここに記し深甚なる謝意を表する。

27) Subtelny氏は「jāndār」を部族名と考え「遊牧の荒野で暮らす (spend their lives) jāndār たち」と訳しているが [Subtelny 1991 : 261, n. 38]、Dawlat Ḥ'āja Ūzbig Jāndār や Amīr Muḡūl Jāndār という人名が見られるから [Mu'izz : 157a, 158a]、部族名とは考え難い。そもそも「暮らす」のではなく「献身的行為を為した (jānsipārliq qilgan)」のであり、後続の語句と対句を成し、スル

日々に奉仕した献身者 (jänsipār) たち、ジャライルの群集 (jalayr ġawġāsi) やカウチンの人集り (qawčim 'alālāsi) [Vaq. : 113b ; Muk. : XIV, 245 ; Kul. : II, 373b ; Sultan : 21-23, 166]

上の引用部では、2つのフレーズが対句的につながった形式でバルラス、アルラト、タルハン、キヤト、コングラトなど著名諸部族や軍事行動で貢献した諸集団が列挙されており、その中に「ウイグルの特性を持つバフシたちやウイグル集団に属する良き者たち」が登場する。「ウイグルの特性を持つ」という表現は、「名」や「血統」でつながる部族を前提とした表現とは異なり、「バフシ」が「ウイグル」とは限らない、という印象を与える<sup>28)</sup>。その一方で「ウイグルの特性を持つバフシたち」と「ウイグル集団に属する良き者たち」は対句的につながっており、「baḥšilar」と“yaḥšilar” (良き者たち) は響きが同じであり、しかも他の部分とは違って、同じウイグルに関するフレーズであるから、両者は厳密には区別されない可能性が大きい<sup>29)</sup>。バフシがみなウイグルとは限らなくとも、スルターン・フサインの臣下の中で「ウイグルのバフシ」が確かな存在感を持っていたことは明らかであろう。

他方「ウイグル」は、同時代中央アジアの遊牧テュルク・モンゴル系軍事集団の1つでもあり、ウズベクのアブルハイル・ハンやシャイバーニー・ハンを戴く部族的諸集団の中にその名が見える [Sultanov : 8, 16 ; Šay. : 5-6]。また、後のヒヴァ・ハン国王家の祖を支えたという伝承も確認できる [ŠT : 184-185]。ところが、ティムール朝下のテュルク・モンゴル系軍事諸集団の中にウイグル部の存在が確認できず、Ando 1992 ですら、問題のアリーシールとその弟以外の名を挙げていない。スルターン・フサイン時代に Šahqulı Uyğur なる人物が「氏族 (qabila) のアミール家の子弟 (mırzā)」とされているから [MN : 178]、世襲のアミールは存在したはずであるが、重要な位置付けのアミールは見当たらず、サマルカンド政権の Sultān Aḥmad 麾下のアミールで「宮廷長 (eşik aġa)」の 'Abd al-karīm Ašrit が「ウイグルであった」 [BN : 34] のが非常に珍しい例である。1370年ティムールが政権を樹立した際に「ディーワーンのアミール」の職位を得た Dawlat-šāh Baḥšī Uyğūr なる人物 (注25) の場合も、その名から見て、軍事集団としてのウイグル部の指導者というより、元来「ウイグルのバフシ」であったと考えられる [ZN : 135a, 141b]。そうすると、ティムール朝においてウイグルは、もっぱらバフシとして存在感を示したことになる。

時代は下るが、モグールの Sultān Sa'id Ḥān 麾下の H'aja Sāqī 'Alī なる人物について TR は「家系はホラーサーンのウイグルに属した (aṣl az üyğürān-i Ḥurāsān būd)」と伝える [TR : 252 ; TR/I : 445]。この人物は1514年カシュガルで勇敢に戦って戦死するが、本来

<sup>28)</sup> ターン・フサインの政治的放浪期に貢献した者たちを指す、と考えるべきである。

28) この点は Subtelny 氏も指摘している [Subtelny 1991 : 261 (n. 36)]。

29) “yaḥšilar” は、おそらくペルシア語の ḥubān と同義で、広く外見や性質の「良き者たち」を指している。しかし、アリーシールの著作の中には “yaḥšilar” が事実上、書記 (この場合はイラン系) を指す箇所がある [Muk. : VII, 228 ; Luġāt : 318 ; San. : 326b]。なお、Subtelny 氏はこの対句的な2つのフレーズが各々別の集団を指すと考えている [Subtelny 1991 : 261, n. 37]。

軍人ではなく「ディーワーン監督官 (mušrif-i divān-i 'ālī)」であったという [ibid.]。先に確認したように、行政書記としてのバフシは財務にも関与したから、「ホラーサーンのウイグル」が、ティムール朝末期のホラーサーンで確認された「ウイグルのバフシ」と直接的な関係を持つ可能性は大きい。「ホラーサーンのウイグル」が、行政・財務に関わる知識・技能を持つ「ウイグルのバフシ」あるいはその子孫と考える根拠は十分にある。

さらに大きく時代が下るが、このような状況と関連して、17世紀半ばヒヴァ・ハン国君主にしてテュルク知識人のアブルガーズイーが、モンゴル帝国におけるウイグルの活躍を、以下のように認識していたことは注目に値する。

ウイグルの民 (haq) にはテュルク語を読む者が多く、簿記 (daftardārliq) や財務会計 (divān hisābları) を良く知っていた。チングス・ハンの子孫 (nabiralār) の時代にマーワランナフル・ホラーサーン・イラクにおいて財務官 (divān) や会計官 (daftardār) はみなウイグルであった。ヒタイ諸国 (yurtlar) においてもチングス・ハンの子孫 (oġlanlar) はウイグルの民から財務官と会計官を選んでいた。[ŠT: 41]<sup>30)</sup>

上の記事では「テュルク語を読む」ことが重視されているが、既に見たように、ウイグル文字の読書が重要であったのであり、テュルク語はモンゴル時代の公用文章語ではなかった。また、マーワランナフル・ホラーサーン・イラクにおける財務官や会計官が「みなウイグルであった」はずはなく、タジク系（イラン系）ムスリム定住民も登用された（注16）。このように史実にそぐわない点もあるが、上の引用部は、「ウイグルの民」が文字・行政・財務に長け、これらの領域で格別の活躍をした、という当時の常識的な歴史認識を示しているのであろう。そして、この歴史認識を定着させたのが、ほかならぬ「ウイグルのバフシ」や「ホラーサーンのウイグル」の存在であったのではないであろうか。

#### IV アリーシールとウイグル、およびモンゴル時代以降のテュルク文語文化

##### 1 アリーシールの著作におけるウイグル、とテュルク、の類義化

ティムール朝スルターン・フサイン麾下の「ウイグルのバフシ」や（後の）「ホラーサーンのウイグル」とアリーシールの家系を直接つなぐ情報は、本稿冒頭で取り上げた TR の記事以外にはない。しかし、前章最終節で見たように、「ウイグルのバフシ」たちはアリーシールの著作の中で、十分な存在感を持つ集団として扱われている。このほかにもアリーシールの著作に「ウイグル」が散見され、時として特別なニュアンスを帯びている。

モンゴル時代の文献には「ウイグルのテュルク人たち (atrāk-i uyğūr)」という表現が見られ [TJ: I, 32], ウイグルは飽くまでテュルクの1集団と見なされているが、アリーシールの著作においては「ウイグル」と「テュルク」の類義化が見られる。

30) この記事の存在は Elias & Ross : 311 (n. 1) で指摘されている。



ウイグルの表現 (uyğur 'ibārātu) に長けた能弁家たちやテュルクの語彙 (türk alfāzı) に通じた雄弁家たちの中に、マウラーナー・サッカーキー Sakkākī とマウラーナー・ルトフィー Lutfī (アッラーが彼ら二人に慈悲を垂れ給わんことを!) がおり、一方はトルキスタンにおいて甘美な詩句 (abyāt) で際限なく有名であり、もう一方はイラクとホラーサーンにおいて優美な抒情詩 (gaz-aliyāt) でこの上なく有名である。[GŞ : 8 ; *Muk.* : I, 14 ; *Kul.* : I, 3b]

ここでアリーシールは言語に関して「テュルク」と「ウイグル」を区別していない<sup>31)</sup>。サッカーキーは「マウランナフルにおける言葉の王 (malik al-kalām)」, ルトフィーも「ホラーサーンの王国でテュルク語とペルシア語における言葉の王」とされ、両者ともアリーシールの同時代人にして彼に先行する高名な「テュルク詩人 (turkī-gūy šu'arā')」である [MN : 215, 252 ; *Muk.* : XIII, 178, 206 ; Hofman : IV, 63-74, V, 153-157]。彼らの著作は主にアラビア文字表記で伝わっているが、ごく一部が1480年イスタンブルでウイグル文字表記とアラビア文字表記の併記で書写された(注23) [Sertkaya 1973 : 165-84, pls. X-XXV]。当時のイスタンブルでは、アリーシールがウイグル語とも見なすテュルク語をウイグル文字で表記することに、違和感を伴わなかったと考えられる。

なお、現在学界で定着している「チャガタイ語」という表現に関しては、アリーシールの著作に次のような一節がある。

アジャムの詩人たちやペルシアの雄弁家たちがあらゆる文体で言葉の花嫁に見栄えを披露させたように、私はテュルクの言語 (türk tili) で筆を走らせた。彼らがあらゆる規則で意味の乙女に飾りや装飾を施したように、私はチャガタイの言葉 (çagatay lafzı) で文字を記した。それは、前述の言語・言葉 (til-u-lafz) が存在する限り、如何なる詩人にも起こり得ず、如何なる文人にも不可能なほどであった。[*Mizān* : 11 ; *Muk.* : XIV, 43 ; *Kul.* : II, 269b ; Eckmann : 4-5]

ここに言う「前述の言語・言葉」が「テュルクの言語」であり「チャガタイの言葉」である。この場合の「チャガタイ」は「モグール」や「ウズベク」と同レヴェルの集団の名称、つまりチャガタイ族(チャガタイ人たち)であり、言語とのつながりが特に強いわけではない。同時代のチャガタイ語文献には、人や集団を表す場合の「テュルク」と「チャガタイ」を類義語として連語的に併記した例があり [BN : 334], また「チャガタイ」の代わりに、「テュルク」を「モグール」に対置させた例もある [do. : 152]。チャガタイ族(チャガタイ人たち)は狭義のテュルク族(テュルク人たち)と同義に近かったと言える。

アリーシールは文字に関しても「ウイグル」と「テュルク」を区別していない。ティムール朝の王子に対する統治指南の書簡において、「上奏書 ('arza-dāšt) はナスターリク書体 (nash-i ta'liq ḥattı) を用い、絶対にテュルク語書体 (türkçä ḥatt) では書かない」よう呼びかけている [Mun. : 59 ; *Muk.* : XIV, 190 ; *Kul.* : II, 398a]<sup>32)</sup>。この「テュルク語書体(文

31) Izzat Sultan は上の記事等により「15世紀ウイグル語とテュルク語(古ウズベク語)は同一言語の方言と見なされていた」と理解している [Sultan : 21]。

32) *Mun.* および *Muk.* では「ナスターリク書体」ではなく「ナスフヤタアリークの書体」

字)」がウイグル文字を指すことは明らかである。

その一方で高名な初期オスマン詩人 Sayyid Nasīmī (d. 1417/18) を「テュルク詩人 (turki-güy şu'arā')」の1人として扱ってはいるが [Muk. : XV, 115-16; Kul. : II, 385a; Sultan : 91], 「ルームやテュルクメンの言語 (rūmī-u-turkmānī til) で詩を詠んだ」 [Muk. : XVII, 478; NM : 437; Sultan : 13] とし, 「ルーム」すなわちアナトリアのテュルク語 (初期オスマン語) や「テュルクメン」(つまりはアゼルバイジャン方面) のテュルク語<sup>33)</sup>と, 自身の用いるテュルク語を区別している。オグズ系と非オグズ系の区別と言い換えられよう。

当時の人々が「ルーム語」を区別した例はほかにもあり, 例えばビナーイーは, 即位以前のスルターン・フサインの蔵書に「Mawlānā Aḥmad Rūmī がルーム語 (zabān-i rūmī) で詩に詠んだ」*Iskandar-nāma* [濱田 1984 : 678] があったと伝える [Šay. : 21-23; 久保 1997a : 42, 50]。実際, 文語としても正書法が異なり, アリーシールの作品をアナトリアで読み易くするため, オスマン語正書法に改める場合もあった [Birnbäum]。このほか使用地域との関連では, クブラヴィーヤのシャイフ Mawlānā Ḥusayn Ḥ'ārazmī [Hofman : III, 267-272] が教友・アラブ詩人 Ka'b b. Zyhayr の *Qaṣīda-yi burda/ Bānat Su'ād* に「ホーラズム方言テュルク語 (Ḥ'ārazmīča turkī tili) で解説を書いた」という [MN : 9; Muk. : XIII, 13; Kul. : II, 303b]。おそらくホーラズムのテュルク語は, 「ルームやテュルクメンの言語」とは異なり, 狭義のテュルク語に含まれると認識されていたのであろう。

アリーシールの著作に見られる, 言語・文字での「テュルク」と「ウイグル」の類義化, および「テュルク語」と「ルームやテュルクメンの言語」の区別化はなぜ生じたのであろうか。第II章第1節で確認したように, 「ウイグルのバフシ」の類義表現は「テュルクのバフシ」や「テュルク語に通じたバフシ」さらには「トルキスタンのバフシ」であった。つまり, 「ウイグル」が「テュルク語 [≒テュルク文語] に通じた」「テュルクのバフシ」として「トルキスタン [≒旧チャガタイ・ハン国領とジョチ・ウルス]」で活躍していたのであり, モンゴル時代以降の当該地域におけるウイグル文字文化とテュルク文語文化の担い手は主にウイグルであったと考えられる。アリーシール個人の事情ではなく, このことが上の状況の要因となったと考えるべきであろう。

## 2 アリーシールのアルシャク朝史叙述に見られるウイグル。

「ウイグル」はさらに, アリーシールによる史書 *Ta'riḥ-i mulūk-i 'Ajam* のアルシャク (アルサケス) 朝史の叙述において, 意外にも人名として現れる。

ある者たちが言うには, イラークとファールスでは Uyqur (اويغور) という名の Ašk [=アルシャ

↙ (nash-u-tāliq ḥattī) となっており, 「テュルク語書体」も *Mun.* では “türkčā ḥatt” ではなく “turkiča ḥatt” となっているが, いずれの場合も良好な写本 (*Kul.*) の表記に従った。

33) ここで言うテュルクメンは, アゼルバイジャンを拠点としたカラコユルやアクコユルのテュルクメン諸部族であり, 現在のトルクメニスタン地域のテュルクメンを指すのではない。

ク]の子孫の1人が帝王であった<sup>34)</sup>。シャープールから50年後のことであり、その時代にヨハネ Yahyā〈彼の上に平安あれ!〉は殉教者となった。彼は王権を息子のゲーダルズに引き継がせた。

Uygūr (ويغور)の子ゲーダルズは偉大な帝王となった。[*Muk.*: XVI, 219-20; *Kul.* II: 361a]

このゲーダルズの父親の名や家系については史料間の齟齬が激しく、同時代人のミールホーンドによれば「筆者がいくら様々な史書を調べても、この集団 [=アルシャク朝王族]の状況や名は詳らかにならず、記されていることにも相違があり、[この王族の]誰についても編年が一致しないほどであった」という[*RS*: I, 728]。アリーシールのアルシャク朝史叙述は、形式・内容ともモンゴル時代の史書 *TB*に見られる叙述に類似しており、事実、彼が参照した文献の中に *TB*が含まれている[*Muk.*: XVI, 204-205, 215, 221-222, etc.]。アリーシールは、この史書において 'YQVR (يغور)の綴りで示された王の名 [*TB*: 46]を "Uyqūr"と読み、Uygūrの異形と見なしたようである。しかし、この王の名は、『タバリー史』に見られる Afqūr-šāh (Pakoros) [*Tab.*: I, 417; *Tab./E*: IV, 101]が不正確に伝えられたものである可能性が大きい。つまり、Afqūr-šāhの Afqūr (افقور)の転訛形 Abqūr (ابقور)/Apqūr (اپقور)を 'YQVR (يغور)と誤読あるいは誤写したと考えられるのである。

アリーシールがこの綴りを「ウイグル」と読み歴史叙述に取り入れた理由は定かではないが、おそらく「ウイグル」への執着などではなく、次の伝承と関係しているであろう。

彼ら [=アルシャク朝王族]にはノア Nuḥの子ヤベテ Yāfiṣの子孫で Āskān という名の1人の祖先 (pidar) がいた。ヤベテの子孫はみな王であった。[*Bal.*: 731]

周知のごとくノアの子ヤベテは、イスラーム史学において早くからテュルク全体の祖とされ [*Tab.*: I, 139; *Tab./E*: I, 11; *Bal.*: 142]、しばしば "abū al-turk" と呼ばれ、テュルクをヤベテの息子の名とする伝承もある。それゆえ、アルシャク朝の系譜にテュルクの1集団の名称「ウイグル」が人名として登場することに、何ら疑問を持たなかった可能性が大きい。

そもそもウイグルは、テュルクの中でもかなり大きく歴史のある集団と見なされていたようである。ティムール朝期の文献にも受け継がれた [*RS*: V, 12; *ZN*: 19a] モンゴル時代のオグズ=カガン説話によれば「ウイグル」の語義は「団結・支援」で、オグズが自分と「同盟した諸部族や叔父たち」および「親族」に付けた「名 (laqab/ nām)」であり、かなり幅広い集団を指す [*JT*: 52, 54, 138; 小山・本田: 53-54]。実際、モンゴル時代の代表的史書に「ウイグル諸集団 (afvāj-i uygūr)」や「ウイグル諸部族 (aqvām)」といった表現が見られ、個別の集団・部族への言及もある [*TJ*: I, 35, 40; *JT*: 139]。これ以前の「トクズグズ」や「九姓回鶻」といった表現も [cf. 井谷: 7]、*ŠT*に引かれた「賢者たち (ḥukamālar)」の言葉「如何なるものの段階も9より上はなく、上限が9である」[*ŠT*: 4] や、贈物を9つで1組とする慣習の存在 [*BN/J*: 134, 注 682; Subtelny 2007: 35, n. 97] など

34) *Muk.*では "Ašk farzandlaridin Uygūr atlıg bir pādšāh erdi" とあるが(下線筆者)、*Kul.*では下線部が "Uyqur atlıg biri" となっている。つまりアシュクの子孫に属する「Uygūr という名の1人の」帝王がいたのではなく「Uyqur という名の」アシュクの子孫の「1人が」帝王であった。

から、1桁の最大数たる9の象徴的意味 [エントレス&シンメル：179-181] に基づいており、含まれる集団の多数性を示していると考えられる。

アリーシールは *Ta'rīh-i anbiyā' va ḥukamā'* でヤベテについて述べた後、「今上陛下の状況や系譜を [別作品で] 述べるつもりなので、今書いているこの史書ではヤベテの歴史にとどめる [=その子孫の歴史にはふれない]」と記す [Muk. : XVI, 106 ; Kul. : II, 332b]。ヤベテの子孫の歴史が含まれるはずの、スルターン・フサインの系譜が著わされることはなかったが、もし実現していれば、再びウイグルが登場した可能性がある。

### 3 アリーシールにとってのテュルク世界とヒタイ、

上述のテュルクの祖とされるヤベテに「スィーン (al-Ṣīn)」 (=チーン Čīn) という名の息子がいた、とする伝承がアッバース朝期の著名なアラビア語史書に見られる [AT : 2 ; Tab./E : I, 238 (n. 459)]。さらにモンゴル時代からティムール朝期にかけては、「チーン」に「マーチーン」という名の息子がおり、それぞれ同名の町を建設したと伝えられていた [TG : 26<sup>35)</sup> ; RŞ : I, 69 ; ZN : 16a, 17a<sup>36)</sup>。通常「チーン」と「マーチーン」は「ヒタイ」以外の中国を指す。一方アリーシールは、前掲書でヤベテについて次のように伝える。

ノア〈彼の上に平安あれ！〉はトゥランの地 (Tūrān-zamīn)<sup>37)</sup> をヤベテに与えた。……彼には Bökā, Ḥazar, Saqlāb, Rūs, Beg, Čīn, Kamā という7人の息子がいた。……ヤベテはヒタイの王国 (Hiṭā mulki) で権力を確立すると、これらの息子たちに与えた土地を、その息子の名で呼んだ。  
[Muk. : XVI, 106 ; Kul. : II, 332b]

ここで注目されるのは、ヤベテが「ヒタイの王国」の支配者となっていることである。アリーシールは別の著作において、ノアが「史家たちがテュルクの父と記すヤベテをヒタイの王国に送った」と伝える [ML : 168 ; ML/L : text 4 ; Muk. : XVI, 10]<sup>38)</sup>。ヤベテがノアから北方・東方の地を委ねられたことは多くのムスリム文献において一致し、子孫が中国の支配者となったとするのも珍しくはない。しかし、ヤベテがヒタイに赴きその支配者となったとする伝承は、少なくともペルシア文人は誰も伝えていない。アリーシールがヤベテとその家系を意図的に中国、特にヒタイと結び付けようとした、と考えざるを得ない。

これに関連して、アリーシールの代表作 (物語詩) の中に次の有名な一節がある。

35) この箇所には校訂の誤りが見られる。原典では疑いなく、「6番目がチーンでマーチーンはチーン [校訂版原文はホタン Ḥutan] の息子である」と記されていたはずである。

36) 上述 TB でもヤベテの息子がスィーンを建設したとするが [12], マーチーンには言及がない。

37) Muk. では「トゥランとホタン」となっているが、これは “zamīn (زمین)” を “va Ḥutan (وختن)” と誤読したものと判断し、Kul. に従って “Tūrān-zamīn” とする。

38) この作品においては、ノアが「ペルシアの父 (abū al-furs) と記されるセム Sām をイランとトゥランと諸国の中間において統治者とした」 [ML : 168 ; ML/L : text 4] とされ、上述 *Ta'rīh-i anbiyā' va ḥukamā'* の引用部と齟齬をきたしている。

部族 (qawm) が同一であろうが 100 あろうが 1000 あろうが<sup>39)</sup>、テュルクのウルス自体が私のものと定まった/私は軍も率いず我が命令の玉座にヒタイからホラーサーンまで易々と手に入れた/我が筆の輩はホラーサーンのみならずシーラーズとタブリーズにも甘美な言葉を振り撒いたようだ/テュルクは私の言葉に心だけでなく命も捧げ、テュルクだけでなくテュルクメンもそうしたようだ [FS: 509-510; Muk.: VIII, 475; Bertel's: 150; Sultan: 11-12; 菅原 2001: 59]

自らの著作が征服した「テュルクのウルス (国あるいは民)」の領域を「ヒタイからホラーサーンまで」と表現している。シャルフ時代の記録では、肅州 (厳密には嘉峪関) 以東が「ヒタイ」とされていたから [ZT: 822, 863-864; 小野 2010: 301, 330], アリーシールの作品を解し得る「テュルク」が、当時のティムール朝の主な支配領域 (マーワランナフルとホラーサーン) より東方、天山地方やタリム盆地を越えて、肅州以東にまで存在したのである。その一方で「ホラーサーンのみならずシーラーズとタブリーズも」とあり、これに応じて「テュルクだけでなくテュルクメンも」とあるから、ファールスやアゼルバイジャンで彼の作品を解したのは「テュルクメン」であり、同じ「テュルク」とは見なしていない。もっとも、テュルクとテュルクメンの区別自体はモンゴル時代のオグズ=カガン説話においても確認することができる [JT: 55; 小山・本田: 55]。問題は、ヒタイの領域に居住するテュルク系の人々に対して、同じ「テュルク」の意識を持っていることである。

これに関連して TR 第 2 部 (1541/42 年完成) に、「ウイグルの領域」に関する先に見た TJ の記事 (本稿 45 頁) を引きながら、「現在ヒタイはよく知られ明瞭であるが、ウイグルの領域は今全然判らないと言われており、この名称で示される場所は 1 つもない」とする記述が見られる [TR: 299; TR/I: 522]。同史料中 Īsān Būqā Hān (d. 1461) の時に「トゥルフアのウイグル族 (qabīla-yi üygūr-i Ṭurfān)」が登場するが [TR: 49; TR/I: 106], 16 世紀前半には、そもそも「ウイグルの領域」と呼べるものが存在しなくなっていたのである。それゆえか、BN において「ヒタイへ行く」ことが「モグーリスターンとトゥルフアへ行く」ことに言い換えられており [BN: 151-152; BN/J: 注 772], 少なくとも BN の著者バブルにとって「ヒタイ」は、かつての「ウイグルの領域」以東を指していたと考えられる。おそらくアリーシールにとっても、「ヒタイ」は本来の肅州以東のみを指すのではなく、より西方のテュルク居住地域をも漠然と含んでいたであろう。

いずれにせよアリーシールにとってのテュルク世界がかなり東方に広がっていたのは確かである。おそらくこれは、モンゴル時代以降に成立した狭義のテュルク文語文化が土台となっていたからである。例えばアリーシールの著作には、「王権がアラブやサルト sart のスルターンたちの中からテュルクのハンたちの下へと移って以来、フレグ・ハンの時代から (両星の結合時に生れた) めでたき王ティムール・キュレゲンの治世まで」作品を伝えるに

39) このフレーズは、部族が「100 (yüz) あろうが 1000 (mīn) あろうが」という意味と、「ユズ (部族) であれミン (部族) であれ」という意味とを掛けている。

値するテュルク詩人は現れなかった、と述べるくだりがある [ML: 188; 菅原 2001: 57]<sup>40)</sup>。その一方で、「サルトのスルトーンたちからも [セルジューク朝の] Sultān Toğrıq ya [ムザッファル朝の] Šāh Šujā' のような偉大な帝王たちや高位の軍人たちが [ペルシア語で] 艶やかな詩句や甘美な抒情詩を詠んだ」と述べる [Muk.: XVI, 35-36; ML: 188; ML/L: text 33]。サンスクリット起源の「サルト」はチャガタイ語文献において「テュルク語を知らないアジャムの都市民 (šahr-lu/ šahr-i)」を意味し [Lugāt: 318, 575; BN/J: 注 61], 18 世紀半ばのチャガタイ語=ペルシア語辞典では「タジク」と同義とされる [San.: 230b]。つまり、セルジューク朝君主をタジクと見なす一方で、フレグ・ハンを最初期の「テュルクのハン」と見なしているのである。また、シャルフ時代のヘラートやサマルカンドで『クタドゥグ・ピリク』(11 世紀後半) や AH (12 世紀前半) などがウイグル文字で書写され、アリーシール自身 NM の中で AH の著者アディーブ・アフマドに言及している [Muk.: XVII, 426; NM: 390-391] にも拘らず、モンゴルの侵攻以前のムスリム・テュルク韻文学の存在を無視している。結局アリーシールの言うテュルク詩は、モンゴル時代に根を持ちティムール朝期に成熟したペルシア古典詩風テュルク詩のみを指しているのである。

アリーシールが著述に用いたテュルク文語については、アンディジャーンのテュルク語に関する、BN の有名な記事が目される。

住民はテュルクである。城内の住民やバーザールの商人でテュルク語 (turki) を知らぬ者はいない。住民の言葉は筆になじむ。なぜなら、ミール・アリーシール・ナヴァーイーの諸作品は、彼がヘラートで成長したにもかかわらず、この地方の言葉で書かれているからである。[BN: 5]

アリーシールはアンディジャーンを訪れたことさえないから、上の記事は、バーブルが自身とその故郷の言語の正統性を主張したものと解することができる。また、フェルガーナ全体のテュルク化に関しては、同時代のマルギーナンやウラテペ山麓の村ディフケトの住民が「サルト」であり、イスファラの住民も「みなサルトでペルシア語話者 (fārsī-gū'i)」であったから [do.: 6-7, 143], 過渡期に過ぎなかったと言える。しかし、アンディジャーンにおけるテュルク語文化の形成には、早くに不十分な形でバルトリドが指摘したように [Barthold: 7], ティムール朝期の一史料によれば、14 世紀初頭のドゥア・ハンによるチャガタイ・ハン国の復興 [加藤: 第 1 章第 3 節; Echmann: 2] が関わっている。

[ドゥア・ハン] 父祖伝来の諸ウルスすべてを支配した。さらにヒタイ諸国に属する多くの地域を手に入れる一方、イランの地 (Īrān-zamin) ではホラーサーンの大部分を自らの領地に加えた。トルキスタンとフェルガーナで幾つかの都市 (šahr-i buzurg) を再生させた。そのうちの 1 つが〈イスラームの天蓋〉アンディジャーン地域 (ḥiṭṭa-yi qubbat al-Islām-i Andigān) で、支配下の諸国全域からこの上なく多くの者をこの地域に連れてきた。今でもこの町の各マハッラは特定の

40) ML/L: text 33; Muk.: XVI, 35-36; Kul.: II, 284a および ML 所載のファクシミリにおいて、“Temür Kūrāgān dawrānīgača” の “dawrānīgača” から次に “Temür Kūrāgān” が出てくるまでのテキストが欠落している。

qawm とつながりを持っている。[MT: 106]

移住させられた人々は、そのまとまりが“qawm”（≒部族）と表現されているから遊牧テュルク・モンゴル系であった可能性が大きく、出身地は、東は「ヒタイ諸国」から西は「ホラーサーンの大部分」までの様々な地域であったはずである。したがってこれが史実であるなら、ムスリム・テュルク共通語がこの地で形成された可能性が十分にある。アンディジャーンの「各マハッラ」の名称や状況は不明であるが、バーブルの時代、アンディジャーン地域の「山麓 (kuhpāya)」の1つが「ウイグル」と呼ばれていたのである [BN: 109]。

以上本章で見たように、アリーシールには、モンゴル時代を起点とする、かなり東よりのテュルク世界認識が確認できる。おそらくモンゴル時代からティムール朝期にかけて、チャガタイ・ハン国領を中心に共通ムスリム・テュルク語が形成され、この狭義のテュルク文語文化を象徴するのが「ウイグル」にほかならなかったのであろう。したがってアリーシールの著作に見られる「ウイグル」の特別なニュアンスや「ヒタイ」への近しさは、当時のテュルク文人として、決して特殊なものではなく、彼の家系と「ウイグル」や「ウイグルのバフシ」との特別な関係を裏付けるには不十分と言わざるを得ない。

## V アリーシールや他のテュルク文人の家系と『バフシ』の家系

### 1 アリーシールの家系とテュルク文語文化

ティムール朝期「ウイグルのバフシ」はウイグル文字文化とテュルク文語文化の主な担い手であり、アリーシールの著作においても「ウイグル」がモンゴル時代を起点とする狭義のテュルク文語文化を象徴する響きを伴った。「ウイグルのバフシ」（あるいは「ホラーサーンのウイグル」）とアリーシールの家系を直接結び付ける証拠は *TR* の記事以外に見当たらないが、この家系には、以下に示すように、アリーシール以外にも韻文学を中心にテュルク文語文化になじんでいた者が少なくない。

アリーシールの母方のおじ Mir Sa'īd Kābuli/ Amīr Sayyid Āqā<sup>41)</sup> は「[ペルシア語より] テュルク語 (türkçā) の方を好んだ」とされ、作品として tuyuğ (同音異義語で脚韻を踏む四行詩) が伝えられている [MN: 78-79; Muk.: XIII, 66]。その弟 Muḥammad 'Alī は良い音楽家で書道にも優れていたが, Ġarībī という筆名を持ち、ペルシア語の開句とともにテュルク語の開句も作品として伝えられている [MN: 79; Muk.: XIII, 66-67]。先の Mir Sa'īd Kābuli/ Amīr Sayyid Āqā の息子（アリーシールの従弟）Mir Ḥaydar<sup>42)</sup> は Şabūḥī という筆

41) この人物の名は、MNによれば Mir Sa'īd Kābuli であり、HS や Maṭla'によれば Amīr Sayyid Āqā である [Barthold: 26 (英訳の際 Mir Sa'īd Aqa と誤記)]。同一人物とする根拠は、双方ともアリーシールの「母方のおじ (tagayī/ hāl)」であり、サラフスでアブーサイドに殺害された点で一致するからである [HS: 127, 243; Maṭla': 901; MN: 79; Muk.: XIII, 66]。

42) この人物の名は *Mud.* では (Amīr) Ḥaydar-i 'Alī-šīr である [Mud.: 147-148]。

名を持ち、詩と謎掛けに優れ、作品にはペルシア語が多いが、テュルク語の開句も伝えられている [MN: 172-73; Muk.: XIII, 144; Mud.: 148-150]。

このほかアリーシールの父は「テュルクであるにも拘らず (bā-vujūd-i turkiyat), 学識・素養 (fazā'il) を放棄せず、幸運なる子息が学識・素養 (faẓl) で飾られるよう、その気高き志を極限まで費やした」という [TS: 891]。「テュルクであるにも拘らず」とあることから、ここで言う「学識・素養」は主にイラン・イスラーム的なものと見なされるが、テュルク文語文化に縁遠かったとは考え難い。またアリーシールの弟 Amīr Darvīš 'Alī の名には時として "kitābdār" (蔵書管理官) の語が伴われる [HS: 155, 188; Mu'izz: 158b]。これは明らかに、チャガタイ詩人・文人としても名高いスルターン・フサインの下での職名を表しており、ルーム語韻文の書物すら含まれる (本稿 56 頁) この君主の蔵書に、狭義のテュルク語文献が多数含まれたことは疑いようがない。

以上のような、アリーシールの家系に見られるテュルク文語文化へのなじみ深さは、この家系を「ウイグルのバフシ」に直接結びつける根拠になり得るであろうか。上奏書においてウイグル文字を使わないようにというアリーシールの呼びかけ (本稿 55 頁) は、ムスリムとしてアラビア文字を尊重する彼の姿勢とは裏腹に、当時のウイグル文字使用の根強さと、ウイグル文字表記をアラビア文字表記に変更する容易さをも裏付けている。ウイグル文字テキスト各行の下にアラビア文字テキストを小さく併記したテュルク語文書は 14 世紀末から各地で作成されている [Radlov; 小野 2000; 同 2002]。アリーシール自身もウイグル文字の読書きができ、バフシをつとめる能力すら持ち合わせていた可能性がある<sup>43)</sup>。

テュルク文語文化、特に文学へのなじみ深さと「ウイグルのバフシ」の直接的な関連を検証するには、アリーシールと同時代の、ティムール朝王族を除く (多くがペルシア語でも著述した) 主なテュルク詩人・文人の出自・経歴を比較考察することが有効であろう。

## 2 テュルク詩人・文人の出自と経歴

アリーシールと同じく当時のテュルク詩人・文人は、その名にアミール (ベグ) の称号を冠しても、部族名を伴わない場合が多く、Amīr Kamāl al-dīn Ḥusayn/ Ḥasan<sup>44)</sup> 'Alī Jalāyir (筆名 Ṭufaylī) [Hofman: VI, 38-39] は珍しい例である。父親 'Alī Jalāyir はシャルフの孫 Abū al-Qāsim Bābur のもとで有力アミールとなり、シャルフの曾孫 Yādgār Muḥammad の下では最高位の amīr al-umarā' にまで昇進する。Ḥusayn 'Alī Jalāyir 本人はスルターン・フサインにクシュベギ、パルヴァーナチとして仕え、後にはバブルにも仕えた [BN: 271; MN: 172; Muk.: XIII, 143-144] (以下、職位については久保 1997b 参照)。

43) 実際、アリーシールは国家財政に十分関与したが [久保 1997b]、バフシの職務に従事した形跡は全く無い。唯一可能性が残るのは Abū al-Qāsim Bābur に仕えた時期であるが、Mu'izz においてこの王子の「テュルクの書記」の欄は空白である [Mu'izz: 146a]。

44) 本来 Ḥusayn であるが、Ḥasan とも呼ばれていた [BN: 271]。



チャガタイ語韻文の *Šaybānī-nāma* (*Šay.* とは別の作品) の著者でシャイバーニー・ハンの下で *amir al-umarā'* かつ「詩人の王 (*malik al-šu'arā'*)」であった *Amir Muḥammad Šāliḥ* (d. 1534/筆名 *Šāliḥ*) [Hofman : V, 294-301] は、時折その名に部族名ベルグト *Belgūt* を伴い、父親はアブーサイド麾下の有力アミール *Nūr Sa'id*, 父方の祖父がシャルフ麾下の有力アミール *Šāh Malik* であったが [BV : I, 95 ; *HŠ* : 276 ; *MN* : 174 ; *Mud.* : 151 ; *Muk.* : XIII, 146 ; Ando : 184-188, 283 ; 川口 : 第 8 章], この *Šāh Malik* の祖先はティムールの祖先の乳兄弟であったという [川口 : 254]。Muḥammad Šāliḥ 自身はスルターン・フサインに仕えたが、BN では詩人として扱われ、その後シャイバーニー・ハンに仕えるまではサマルカンド政権の *Sultān 'Alī* に仕えていた [BN : 56, 281-282]<sup>45)</sup>。

アリーシールにとって「父のような」存在であった *Amir Sayyid Ḥasan Ardašir* (d. 1489) [Hofman : III, 190-191] は、父親 *Amir Ardašir* がシャルフの子 *Bāysungur* のクシュチ、後にクシュベギであり、本人も時折その名に「クシュチ」の語を伴っている。最初は上述 *Bāysungur* に仕え、スルターン・フサインの下で印璽官 (*muhrdār*) ついで *amir-i divān* となった [*Mu'izz* : 158a, 159a ; *Hālāt* : 91 ; *MN* : 81-82 ; *Muk.* : XIII, 68]。

元はアブーサイドの「お気に入りの従者 (*maḥṣūṣ mulāzim*)」であり、スルターン・フサインの下でパルヴァーナチ、印璽官、後には有力アミールとなった *Amir Niẓām al-dīn Šayḥ Aḥmad Suhaylī/ Šayḥum Suhaylī* (d. 1501/筆名 *Suhaylī*) [Hofman : V, 188-192] は「ホラーサーン国の傑出した部族 (*muta'ayyin el*)」の出身で、「テュルク詩にはあまりいそしまなかった」とされるが、作品は伝わっている [*HŠ* : 159 ; *MN* : 84-86 ; *Muk.* : XIII, 71-72 ; *Mu'izz* : 158b, 159a ; *TŠ* : 913]。ジャーミーがこの人物に対し「ミールザー」と呼びかけているから [BN : 27], 元々アミールの家系に属していたと考えられる。

*TŠ* の著者ダウラトシャー [Hofman : III, 7-10] は通常テュルク詩人・文人とは見なされないが、アリーシールのテュルク詩を味わう能力を持ち、*TŠ* 中で自作テュルク詩を披露している [*TŠ* : 892, 901-903, 913]。ダウラトシャーは世襲のアミールの家系に属し、その父 *'Alā' al-dawla Isfarāyīnī/ Samarqandī* は、シャルフの下で *amiir al-umarā'* にのぼりつめた *Firūz-šāh* の父方のおじの息子 (*'ammzāda*) であったが、この *Firūz-šāh* の父親 *Argūn-šāh* は元テュルクメン系グラムで主馬官 (馬群管理官) であったという [*MN* : 171 ; *Muk.* : XIII, 171 ; 安藤 : 108-110 ; 川口 : 304-305]。

アミールの称号を伴わない著名なテュルク詩人のうち、ムキーミー *Muqīmī* [Hofman : IV, 208-209] はヘラート出身でタルハン部に属し、ダルヴィーシュとして暮らしていたという [*MN* : 75 ; *Muk.* : XIII, 63, XVII, 477 ; *NM* : 436]。一方、アターイー *Atāyī* [Hofman : II, 124-127] はバルフ在住者で、アフマド・ヤサヴィーの弟の子イスマーイーール・アタの子孫、

45) このほか *Abū al-Qāsim Bābur* 麾下の *amir-i divān* にも同名の者がいるが [*Mu'izz* : 145b], 当該 *Muḥammad Šāliḥ* が没する 80 年近く前のことになるから、同一人物である可能性はない。

つまりテュルク系シャイフの家系に属したとされる [MN: 74; Muk.: XIII, 63, XVII, 420; NM: 384]。著作 *Dah-nāma* のウイグル文字写本が存在するアミーリー Yūsuf Amīrī [Hofman: II, 92-97] はシャルフ時代の詩人であるが、その筆名は本人の身分に依るものではないとする見解がある [TS: 800-801; Togan 1963: 21, 39-40]。テュルク語・ペルシア語両方に通じた LN (大半は MN のペルシア語訳) の著者 Faḥrī b. Sulṭān Muḥammad b. Amīrī<sup>46)</sup> は、このアミーリーの孫である可能性が大きい。

このほか、当時のテュルク詩人に関するもっとも重要な史料 MN によれば、スルターン・フサインのサドルとなった者 (Mawlānā Na'imī), アブーサイドの子 Mas'ūd の従者であった者 (Mawlānā Qutbi), 父親がアブーサイドやスルターン・フサイン麾下の有力アミールで自らもアミールであった者 (Mīrzā Beg), アミールの家系に属する者たち (Šīram; Ibrāhīm Muḥammad Ḥalīl), 父親がマシュハドのハーキムをつとめたが自らはダルヴィーシュとなった者 (Darviš Nāzuki), 有名なルトフィーをはじめ出自は詳らかではないが神秘主義の道を歩んだ者たち (Mawlānā Ḥusayn Ḥ'ārazmī; Ḥarīm Qalandar; Mawlānā Kamālī) がテュルク語で著述した [MN: 9-10, 29, 57, 64, 75, 80-81, 175, 177; Muk.: XIII, 13-14, 27-28, 49, 55, 63, 67, 146, 148]<sup>47)</sup>。

以上のように、アリーシールと同時代のテュルク詩人・文人の大部分が、クシュチ、印璽官、パルヴァーナチなどイチュキ (近習)・ムカッラブ (側近) と呼ばれる近臣集団 [久保 1997b: 150, 158-159] に属す者、有力アミールやその子孫、およびヤサヴィーヤのシャイフの子孫など神秘主義に関わる者である。バルフ在住で霊廟に住む Mawlānā Majnūnī なる詩人が「書家のようなこと (kitābatqna) ができ生活費をかせいでいるらしい」とある [MN: 119; Muk.: XIII, 99] のが珍しい例である。「ウイグル」に属する者も、その名に「バフシ」の語を伴う者も見当たらない。ただ 1 人テュルク語・ペルシア語両方で優れていたという詩人 Sāqī が、Ja'far Baḥṣī なる人物の息子と伝わるのみである [MN: 179; Muk.: XIII, 150]。この父親の名は他史料に見えず、本人は「武人の道 (sipāhīlīq ṭarīqī) において屈強であった」と伝えられ [ibid.]、バフシの職務との関わりは不明であるが、先述 Ḥ'āja Sāqī 'Alī (本稿 53 頁) と同一人物であるなら、「ホラーサーンのウイグル」である。

結局 MN には、先行研究で、ティムール朝期の「バフシ」かつテュルク詩人と見なされている Maṅṣūr Baḥṣī [Hofman: IV, 118-121; Gandjei 1964: 164], Ḥasan Qara Sā'il Šams [Sertkaya 1977: 14], Muḥammad al-Kātib [Togan 1963: 4] やその縁者も、バフシと関

46) この人物の名は、写本によって Faḥrī b. Sulṭān Muḥammad Amīrī あるいは Faḥrī Sulṭān Muḥammad b. Amīrī と異なり [LN: XXVIII (KH)], 後者を採る場合が多いようであるが [Hofman: III, 20-21], 筆者は Faḥrī b. Sulṭān Muḥammad b. Amīrī が正しいと考える。

47) ティムール朝王族を除けば、MN において、テュルク語の韻文作品が伝わる、あるいはテュルク詩人・文人と見なされている者は、合計 31 名である。ただし、この中に上述 Muḥammad Šalīḥ, Dawlat-šāh, アリーシールの従弟 Haydar, およびペルシア詩人でありながらテュルク語の著作も残しているビナーイー [久保 1997a: 33] は含まれていない。

わりを持つ者も、ほとんど登場しない。アリーシールは、ティムール時代からシャルフ時代末期にかけて優れたテュルク詩人が出現し始めたと述べるが [ML : 188], この動きの中で「ウイグルのバフシ」が存在感を示すことはなかったのである。

### 3 <sup>6</sup>バフシ、の経歴およびその家系

前節で確認したように、文学、特に韻文学に限れば、テュルク文語文化へのなじみ深さは「ウイグルのバフシ」に直結しない。テュルク詩人・文人およびその家系はイチユキ・ムカッラブと呼ばれる王族の近臣集団に属する場合が多く、第I章第1節で見たように、アリーシールの家系も例外ではない。実は、「バフシ」も近臣集団に属したと考えられる [久保 1997b : 158]。この近臣集団の中から高位に昇進する者がよく現れるが、その名にバフシの語を伴う者も、時にはアミール (ベグ) の称号を冠し、また時にはバフシの職務以外で活躍した。このような例について、アリーシールほかテュルク詩人・文人およびその家系の場合と比較するため、まずは *Mu'izz* で確認できる人名・職位を以下に示す。

ティムール麾下のディーワーンのアミール (amīr-i divān)<sup>48)</sup> 3人 :

Dawlat-šāh Baḥšī ; Šāh Baḥšī ; Malik-šāh Baḥšī [*Mu'izz* : 97a]

シャルフ麾下の万人隊長 (amīr-i tūmān) 麾下の軍指揮官 (千人隊長) 3人 :

Baḥšī (左翼 'Alīka Kūkaltāš の万人隊) [do. : 135b] ;

Īrān-šāh Baḥšī (右翼 Ḥusraw Tarḥān の万人隊) [do. : 135b] ;

Sultān Baḥšī (中軍 Pīr-Luqmān の万人隊) [do. : 137a]

シャルフの子 'Abd al-laṭīf 麾下のトヴァチのアミール (amīr-i tuvāčī) 1人 :

Sultān Baḥšī<sup>49)</sup> [do. : 140b]

シャルフの子 Ibrāhīm Sultān 麾下の宿営官 (yūrtčī) 1人と主馬官 (aḥtāčī) 1人 :

Bāyazīd Baḥšī (yūrtčī) ; Ūzbig/ Ōzbeḡ Baḥšī (aḥtāčī) [do. : 142b]

シャルフの子 Bāysunḡur の孫 Ibrāhīm 麾下のサドル 1人 : Mawlānā Baḥšī [do. : 145a]

48) *Mu'izz* のティムール朝王族各成員の臣下のリストでは、通常、最初に “šarḥ-i umarā-yi ū” (そのアミールたちの説明) という枠全体の標題が付されているが、この標題が “šarḥ-i umarā-yi divāniyān” (ディーワーンのアミールたちの説明) あるいは “šarḥ-i divāniyān” となっている場合があり [108b, 129a], 枠内最初に “divāniyān” という見出しが示されることも多い [102b, 104b, 107b, 110b, 117b, 119b, 137(bis)b, 141b, 155a]。また “divāniyān” の見出しの有無に拘らず、枠内最初のアミール名列挙の後 “tuvāčiyān” という見出しがあって再びアミール名が列挙される。さらにシャルフの項に見られる個々のアミールの説明を参照すると次のように言える。枠内最初に amīr-i divān のリスト、その次に amīr-i tuvāčī のリストが配され、それぞれの集団を divāniyān および tuvāčiyān と呼んでいる。ただし、1例のみ divāniyān が “nīvisandagān-i tāzīk” (タジクの書記=財務高官・ワズィール) を指している [140b]。なお、スルターン・フサインの項は様式が異なっており、しばしばアミール名に “māl” や “tuvāčī” の書き込みが見られる。

49) *Mu'izz* の該当箇所では Sultān-baḥš と書かれているように見え、右隣には Ḥudāy-baḥš なる人名も見られる。しかし、Ḥudāy-baḥš ならともかく Sultān-baḥš という名はあり得ないと判断し、シャルフ麾下の Pīr-Luqmān の万人隊に属する軍指揮官 Sultān Baḥšī と同定した。

アブーサイドの子 Sultān Maḥmūd 麾下の万人隊長 2 人：

Amīr Pīr-Aḥmad Baḥšī ; Amīr Pīr-Ḥusayn Baḥšī [do. : 155a]

スルターン・フサイン麾下のトヴァチのアミール 3 人：

Bīrdī/ Berdī Beg Baḥšī ; Muḥammad ‘Alī Baḥšī Ḥāldār ; Ġiyāš Baḥšī [do. : 157a, 158a]

スルターン・フサイン麾下のディーワーンあるいはトヴァチのアミール 1 人：

Muḥammad Baḥšī [do. : 157b]

以上 15 名（重複があり実質 14 名）のうち、ティムール政権樹立時に amīr-i dīwān となった Dawlat-šāh Baḥšī は、先にふれたように（注 25 および 53 頁）、Dawlat-šāh Baḥšī Uygūr と記される時もあり、まさに「ウイグルのバフシ」であったが、ほかにウイグルと確認できる者は見当たらない。ティムール時代からスルターン・フサイン時代まで、名に「バフシ」の語を伴う者が amīr-i dīwān, amīr-i tuvācī, amīr-i tūmān といった大物アミールになる例は尽きなかった。また「サドル」となった例は特殊であろうが、近臣として「宿営官」や「主馬官」の職務に従事し、また特定の万人隊に属し（千人隊長として）軍を率いるなど、軍の管理や軍事行動に関わる場合が少なくなかったようである。

スルターン・フサイン麾下の amīr-i tuvācī である Muḥammad ‘Alī Baḥšī Ḥāldār と Ġiyāš Baḥšī は、それ以前は「テュルクの書記」であった [Mu‘izz : 159a]。また、アブーサイド麾下の Muḥammad ‘Alī Baḥšī は、スルターン・フサインに対し軍を率いもしたが [BN : 255]、アブーサイドとその子 Aḥmad およびスルターン・フサイン麾下の同名人物は、あくまで「テュルクの書記」もしくは「バフシ」とされている [Mu‘izz : 152b, 154a, 159a]。そもそもバフシの職務と軍事行動は峻別されるものではなかったであろう。

このほか王族と外戚関係を結んだ例もあり、Barāt Ḥ‘āja Baḥšī なる人物が、娘をシャルフの孫 ‘Alā’ al-dawla の「側室 (qumā)」とし、この娘は王子を産んだ [do. : 144b, 145a]。他の史料に見られる例では、Amīr Šams al-dīn Muḥammad Baḥšī なる人物がスルターン・フサインからの “istimālat-nāma”（民撫状）をヘラート住民に届けており [Maṭla‘ : II, 1035]<sup>50</sup>、職位については不明であるが、かなりの重要人物と思われる。ティムール朝と近接する時代・地域においても、バーブルの勅令（1527 年）の中で Sultān Muḥammad Baḥšī なる人物が「寵臣たちの支柱 (‘umdat al- ḥavāṣṣ)」と呼ばれ [BN : 516]、ティムール朝からウズベクに乗り換えて、スルターン・フサインの寵妃を得た Šāh Mansūr Baḥšī なる人物が、ティムール朝滅亡時にアンドウフードの統治者であった [BN : 320, 323] など、側近・軍指揮官としてバフシの職務以外で重きをなした例が散見される。

家系に関わる事例では、スルターン・フサイン時代に ‘Abd al-laṭīf Baḥšī なる人物がアミールの称号を持ち軍事行動に従事しているが、その「親族 (ḥ‘iṣ)’ の ‘Alīka Baḥšī もバル

50) この後アリーシールもヘラートに派遣された。このくだりは HS にも記されているが [HS : 145]、Amīr Šams al-dīn Muḥammad Baḥšī の名は見当たらない。

フの統治者の臣下として、“burj”の防衛に従事している〔*HS*: 210-211, 217〕。両者ともその名に「バフシ」の語を伴い、それでいて軍事行動に従事しているのである。「タルハン」やウズベクの「クシュチ」の場合〔安藤: 101, 注 22; Sultanov: 12-15; *Šay.*: 5〕のように「バフシ」が氏・部族名に転じた可能性もある。しかし、以下の 2 家系の事例から判断すると、バフシの技能が家系や親族間で受け継がれていたと考えるのが妥当であろう。

先にもふれたが、スルターン・フサインの下で *amir-i tuvāci* となった *Ġiyāš Baḥšī* は、それ以前は「テュルクの書記」であった。この *Ġiyāš Baḥšī* の昇進後 *Mu‘izz* の「テュルクの書記」の欄には、*Sultān Bāyazid valad-i Ġiyāš Baḥšī*, つまり *Ġiyāš Baḥšī* の息子の名が現れる〔*Mu‘izz*: 159a〕。同じくスルターン・フサイン麾下で *amir-i tuvāci* となる前に「テュルクの書記」であった *Muḥammad ‘Alī Baḥšī Ḥāldār* は、1506 年作成のワクフ文書において〔*Ḥāldār*<sup>51)</sup> *Baḥšī* として有名な *Mir Muḥammad ‘Alī*〕と言及され、その父親は *Mir Sultān Baḥšī* とされている〔*Subtely* 2007: 271, 321〕。この *Mir Sultān Baḥšī* は、ほぼ間違いなく、シャルフとその子 *‘Abd al-laṭif* に仕え千人隊長や *amir-i tuvāci* をつとめた *Sultān Baḥšī* のことであろう。ところが、この人物については「テュルクの書記」の職歴を確認できない。つまり、父子とも名に「バフシ」の語を伴うケースで、父親に「テュルクの書記」の職歴が確認されなくとも、息子は「テュルクの書記」をつとめているのである。

このように「バフシ」の技能や、時には職位も、家系で受け継がれていたと考えられる。注目すべきことに、上述 *Muḥammad ‘Alī Baḥšī Ḥāldār* については、史料中父親だけでなく息子にも言及が見られる。*Mu‘izz* におけるスルターン・フサインの“*tuvāciyān*”つまり *amir-i tuvāci* (注 48) の欄に「*Amir Ḥāldār* の息子 (*valad*) の *Abū al-qāsim* なる人物が挙げられ、「*Amir Ḥāldār* 没後この職位を与えられた」という解説が付されている〔*Mu‘izz*: 158a〕。この *Amir Ḥāldār* が *Ḥāldār Baḥšī* という通り名で知られた *Muḥammad ‘Alī Baḥšī Ḥāldār* を指すことは疑いない。息子の *Abū al-qāsim* は *HS* に *Abū al-qāsim Baḥšī* の名で登場し、1513 年ヘラートにおいてサファヴィー朝に対する反乱を起こすが、かつてはスルターン・フサインの下で「バフシの最有力アミールたち (*a‘āzim-i umarā’-i baḥšī*) の列に加わっていた」という〔*HS*: 536-537; 久保 1988: 156-157, 162 (注 25)〕。

以上のように、この *Sultān Baḥšī* — *Muḥammad ‘Alī Baḥšī Ḥāldār* — *Abū al-qāsim Baḥšī* の家系は、3 代にわたって有力アミールに昇進し、アミール (あるいはミール) の称号を保持した。それでいて、その名に「バフシ」の語をも伴い続け、先に見たように「テュルクの書記」としての技能も受け継いでいたと考えられる。「バフシ」との関わりが見出せないアリーシールや他のテュルク詩人・文人の家系とは、大きな隔たりを感じざるを得ない。

人名末尾に付される「バフシ」の語に関して言えば、史料中この語が省略されることは珍

51) *Muḥammad ‘Alī Baḥšī Ḥāldār* の“*ḥāldār*”は「はくろのある(者)」という語義である。同名同時代人 *Muḥammad ‘Alī Baḥšī* (本稿 66 頁) と区別する上でこの語が重視されたものと思われる。

しくはない。例えば *Mu'izz* において、上述 *Sultān Baḥsī* 家の2代目を *Muḥammad 'Alī Ḥaldār* [*Mu'izz* : 158b], 3代目を *Abū al-qāsim* [do. : 158a] とのみ記した箇所があり、また先に述べたように(本稿49頁)「テュルクの書記たち」35人中17人の名に「バフシ」の語が欠けており、見出しが“*baḥṣiyān*”となっている場合ですら3人中1人の名は「バフシ」の語を欠いている [do. : 154a]。さらに前節末に言及した詩人のバフシ3人のうち2人の名は「バフシ」の語を伴っていない。しかし、行政書記・能書家の技能を受け継いだバフシの家系に属する者が、常にその名に「バフシ」の語を欠くことは考え難い。時間的・空間的に十分隔たりのある史料 *TR* に記された、父親の名のみに「バフシ」の語を伴うアリーシールの家系が、バフシの家系である可能性は皆無に近いと言わざるを得ない。

### おわりに

以上の考察から明らかなように、アリーシールの父の名を *Kiçkina Baḥsī*, その家系を「ウイグルのバフシ」の家系とする *TR* の記事を、そのまま受け入れることは不可能である。

元來仏教の師を意味した「バフシ」は、モンゴル時代にウイグル文字文書記・書家をも意味するようになり、ウイグル文字表記モンゴル語の読書に通じたバフシたちが、行政書記として活躍するようになった。当初この職務を担ったのが「ウイグルのバフシ」であったと考えられ、その後は非ウイグル・非テュルクのバフシの存在も確認できる。ティムール朝においてウイグル文字表記テュルク語がペルシア語と並んで公用文章語となり、ウイグル文字書道も発達し、主にテュルク系のバフシたちが行政書記・能書家として活躍した。ティムール朝末期のホラーサーンにおいてバフシと言えは「ウイグルのバフシ」であり、やや後には「ホラーサーンのウイグル」と呼ばれる人々の存在も確認される。

アリーシールの著作において「ウイグル」という語が、先行する狭義のテュルク文語文化を象徴する響きを持ち、アリーシール自身、この狭義のテュルク文語文化、およびこれと不可分の東よりのテュルク世界認識を受け継いでいた。これは彼に限ったことではなく、バフシと言えは「ウイグル」、テュルク文語・文字と言えは「ウイグル」という認識が、テュルクの人々の間に広まっていたと考えられ、その起点はモンゴル時代に求められる。

しかし、アリーシールやその他のティムール朝期の著名なテュルク詩人・文人の家系と、バフシの家系とを具体的に比較すると、両者の間には大きな隔りがある。時間的・空間的に *TR* よりアリーシールに近い同時代史料に記されていないことを、史実と受け入れる理由・根拠は存在しない、と言わざるを得ない。なお、かつての「バフシ」の異教徒性などからアリーシールとその周囲が意図的に伏せたという可能性については、同時代に王族のサドル(宗務長官)をつとめたバフシの存在(本稿49, 65頁)や、アリーシールの著作における「ウイグルのバフシ」の存在感を考えると、検討するに値しないであろう。

結局 *TR* の当該記事は、モンゴル時代を起点とする、狭義のテュルク文語文化における

「ウイグルのバフシ」の存在感の大きさゆえに生み出された可能性が大きく、いわば、TRの著者やその周囲の人々の思い込みではなかったか、と考えられるのである。もっとも、「ウイグルのバフシ」であったのがかなり遠い祖先であるため、名に伴うはずの「バフシ」の語などの痕跡が消え去っていた可能性は、わずかにではあるが、残されているであろう。

アリーシールの出自や帰属集団に関する残された検討課題は、本稿で言及したティムール朝近臣集団（イチユキ・ムカッラブ）におけるこの家系の位置づけ、およびアミール（ペグ）の職位や称号との関わりである。これらについては現在別稿を準備している。

## 参考文献

- AH : Adīb Aḥmad b. Maḥmūd Yūknakī, *'Atabat al-ḥaqā'iq*, ed. R. R. Arat. 2nd ed. Istanbul, 1992.
- AM : Ibn 'Arab-šāh, *'Ajā'ib al-maqdūr fī Nawā'ib Taymūr*, ed. A. F. al-Himṣī. Beirut, 1986.
- AT : Abū Ḥanīfa Aḥmad b. Dāwud al-Dinawarī, *Kitāb al-Aḥbār al-tiwāl*, ed. 'Abd al-Mun'im 'Āmir. Baghdad, n. d.
- Bal. : Abū 'Alī Muḥammad b. Muḥammad b. Bal'amī, *Ta'riḥ-i Bal'amī/ Takmila va tarjuma-yi Ta'riḥ-i Ṭabarī*, eds. Taqī-bahār, M. & M. P. Gonābādi, 2 vols. Tehran, 1353 (1974/75).
- BN : Ḥāhir al-dīn Muḥammad Bābur, *Bābur-nāma/ Vāqi'āt*, ed. E. Mano, 2nd ed. Kyoto, 2006. [間野英二『バーブルナーマの研究 I 校訂本』第2版, 松香堂.]
- J : 間野英二『バーブルナーマの研究 III 訳注』松香堂, 1998年.
- BV : Zayn al-dīn Maḥmūd Vāṣifi, *Badā'i' al-vaqā'i'*, ed. A. N. Boldyrev, 2 vols. Tehran, 1972.
- Clavijo : *Рyu Гонсалес де Клавихо/И. С. Мирокова* (пер.) «Дневник путешествия в Самарканд ко двору Тимура (1403-1406)». Москва, 1990.
- DK : Muḥammad b. Hindū-šāh Naḥḥībānī, *Dastūr al-kātib fī Ta'yīn al-marātib*. Критический текст, предисловие и указатели А. А. Али-заде. Том 2. Москва, 1976.
- FŠ : Navāyī (Amīr Nizām al-dīn 'Alī-šīr), *Farḥād va Šīrīn*, ed. G. Alpay-Tekin. Ankara, 1994.
- ĠS : Navāyī (Amīr Nizām al-dīn 'Alī-šīr), *Ġarā'ib al-šīgar*, ed. G. Kurt. Ankara, 2003.
- Ḥālāt : Navāyī (Amīr Nizām al-dīn 'Alī-šīr), *Ḥālāt-i Sayyid Ḥasan Ardašīr/ Nevāyī'nin «Ḥālāt-i Seyyid Hasan Beg» Risālesi*, ed. Kemal Erarslan. *Türkiyat Mecmuası* 14 (1971).
- ḤS : Ḥ'ānd-amīr (Ġiyāš al-dīn b. Humām al-dīn Muḥammad), *Habīb al-siyar fī Aḥbār afrād al-bašar*, eds. J. Homā'i & M. Dabīr-Siyāqi. vol. 4. Tehran, 1333 (1954/55).
- ĪA : *İslām Ansiklopedisi*, 13 vols. İstanbul, 1940-1988.
- JT : Rašīd al-dīn Fazlullāh Ḥamadānī, *Jāmi' al-tavāriḥ*, eds. Moḥammad Rowšan & Moštāfā Mūsavī, 4 vols. Tehran, 1994/95.
- Kul. : Navāyī (Amīr Nizām al-dīn 'Alī-šīr), *Kulliyāt-i Navāyī*, I-II. MS. Bibliothèque nationale (Paris), Suppl. Turc 316, 317.
- LN : Faḥrī Hirātī/ Hiravī, *Laṭā'if-nāma*, ed. A. A. Ḥekmat. In : Mir Nizām al-dīn 'Alī-šīr Navā'i, *Taḍkira-yi Majālis al-naḥā'is*, ed. A. A. Ḥekmat. Tehran, 1945.
- Lugāt : Niyāzī, *al-Lugāt al-Navā'īya va al-Istiḥādāt al-Ġaḡatā'īya*, ed. M. S. Kaçalin. Ankara, 2011.

- MA : Ḥ<sup>v</sup>āndamīr (Ġiyāṣ al-dīn b. Humām al-dīn Muḥammad), *Makārim al-aḥlāq*, ed. Moḥammad Akbar 'Aṣīq. In: *Majmū'e-ye rasā'el-e Fārsī* (Bonyād-e Pažūhešhā-ye Eslāmī-ye Āstān-e Qods-e Reẓavī) 4. Mashhad, 1995.
- F : T. Gandjei (ed.), Facsimile (MS. British Library, Add. 7669). Cambridge, 1979.
- Maṭla' : Kamāl al-dīn 'Abd al-razzāq Samarqandī, *Maṭla'-i sa'dayn va Majma'-i baḥrayn*, ed. 'Abd al-Ḥoseyn Navāyī, vol. 2 in 2 parts. Tehran, 2004.
- Mizān : Navāyī (Amīr Nizām al-dīn 'Alī-šīr), *Mizān al-awzān*, ed. Kemal Eraslan. Ankara, 1993.
- ML : Navāyī (Amīr Nizām al-dīn 'Alī-šīr), *Muḥākamat al-luḡatayn*, ed. & tr. F. Sema Barutçu Özönder. Ankara, 1996.
- D : Robert Devereux (ed. & tr.) Leiden, 1966.
- MN : Navāyī (Amīr Nizām al-dīn 'Alī-šīr), *Majālis al-nafā'is*, ed. Suyima G'anieva. Tashkent, 1961.
- MT : Mu'in al-dīn Natanzī, *Mumtaḥab al-tavāriḥ-i Mu'ini*, ed. J. Aubin. Tehran, 1957.
- Mud. : Sayyid Ḥasan Niṣārī Buḥārī, *Muḍakkir-i aḥḥāb*, ed. N. M. Hiravī. Tehran, 1999.
- Mu'izz : *Mu'izz al-ansāb*. MS. Bibliothèque nationale (Paris), Ancien fonds persan 67.
- Muk. : *Алушар Назовуи «Мукамал асарлар тўплами»*. 20 томлик. Тошкент, 1987-2003.
- Mun. : Navāyī (Amīr Nizām al-dīn 'Alī-šīr), *Munša'āt*. Baku, 1926.
- NM : Navāyī (Amīr Nizām al-dīn 'Alī-šīr), *Nasā'im al-muḥabbat min Šamā'im al-futuwwa*, ed. K. Eraslan, vol. 1. Ankara, 1996.
- RJ : Mu'in al-dīn Muḥammad Zamčī Isfizārī, *Rawzāt al-jannāt fi Awṣāf madīnat Hirāt*, ed. Seyyed Moḥammad Kāẓem Emām, 2 vols. Tehran, 1959-60.
- RS : Mīrḥ<sup>v</sup>ānd (Mīr Muḥammad b. Sayyid Burhān al-dīn Ḥ<sup>v</sup>āvand-šāh), *Rawzāt al-ṣafā'*, 10 vols. Tehran, 1960.
- San. : Muḥammad Mahdī Ḥān, *Sanglāḥ*, ed. G. Clauson. London, 1960.
- Šay. : Binā'ī (Kamāl al-dīn 'Alī), *Šaybānī-nāma*, ed. K. Kubo. Kyoto, 1997. [『トルコ・イスラム時代中央アジア文化の総合的研究』平成6~8年度文部省科学研究費補助金 基盤研究(A)(1) 研究成果報告書(研究代表者: 間野英二/課題番号 06301043).]
- ŠT : Abū al-ḡāzī Bahādur Ḥān, *Šajara-yi Turk*, ed. & tr. P. I. Desmaisons. Repr. Amsterdam, 1970.
- Tab. : Abū Ja'far Muḥammad b. Jarīr al-Ṭabarī, *Ta'riḥ al-umam wa al-mulūk/Ta'riḥ al-rusul wa al-mulūk*, 10 vols. Beirut, n. d.
- E : *The History of al-Ṭabarī: An Annotated Translation*, ed. E. Yar-Shater et al., 39 vols. Albany, 1985-1999.
- TB : Faḥr al-dīn Abū-Sulaymān Dāūd, *Ta'riḥ-i Banākati*, ed. Ja'far Še'ār. Tehran, 1348 (1969/70).
- TG : Ḥamdullāh Mustawfī Qazvīnī, *Ta'riḥ-i guzida*, ed. 'Abd al-Ḥoseyn Navā'ī. Repr. Tehran, 1364.
- TJ : 'Atā' Malik Juvaynī, *Ta'riḥ-i jahān-gušāy*, ed. M. A. Qazvīnī, 3 vols. Repr. Tehran, n. d.
- TM : *Tadkīrat al-mulūk/Tadhkīrat Al-Mulūk: An Manual of Safavid Administration*, translated and explained by V. Minorsky. Cambridge, 1943, repr. 1980.
- TR : Muḥammad Ḥaydar Duḡlāt, *Ta'riḥ-i Rašīdī*, ed. W. M. Thackston. Harvard University, 1996.
- I : 'Abbās-Qolī Ġaffrārī-Fard (ed.) Tehran, 2004.



- E : W. M. Thackston (tr.) Harvard University, 1996.
- R : А. Урунбаев, П. Джалилова, Л. М. Епифанова (пер.) Ташкент, 1996.
- TS : Sām Mirzā Šafavī, *Tuhfa-yi Sāmī*, ed. R. Homāyūn-Farroḥ. Tehran, 1969.
- TŠ : Dawlat-šāh Samarqandī, *Taḍkirat al-šu'arā'*, ed. Fāṭeme 'Alāqeh. Tehran, 2007.
- Vaq. : Navāyī (Amīr Nizām al-dīn 'Alī-šīr), *Vaqfiya*. Facsimile (Рукопись. Государственная Публичная Библиотека им. М. Е. Салтыкова-Щедрина. Ханьков № 55). In : Subtelny 1991.
- ZN : Šaraf al-dīn 'Alī Yazdī, *Zafar-nāma* (Facsimile), ed. A. Urunbayev. Tashkent, 1972.
- ZT : Ḥāfiẓ-i Abrū, *Zubdat al-tavāriḥ*, ed. S. Ḥ. Javādī, 2 vols. Tehran, 1993.
- Ando, S. (1992) *Timuridische Emire nach dem Mu'izz al-ansāb: Untersuchung zur Stammesaristokratie Zentralasiens im 14. und 15. Jahrhundert*. Berlin.
- Barthold, V. V. (trs. V. & T. Minorsky) (1962) *Four Studies of the History of Central Asia, vol. 3: Mir 'Alī-Shīr; A History of the Turkman People*. Leiden.
- Bertel's, E. E. (1965) *Евгений Эдуардович Бертельс*. Навои. «Избранные труды: Навои и Джами». Москва. [初版 «Навои: Опыт творческой биографии». Москва, 1948.]
- Birnbaum, E. (1976) The Ottomans and Chagatay Literature: An Early 16th Century Manuscript of Navā'ī's Divān in Ottoman Orthography. *CAJ* 20 (3).
- Cleaves, F. W. (1953) The Mongolian Documents in the Musée de Téhéran. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 16 (1/2).
- de Rachewiltz, I. (1969) The Mongolian Poem of Muḥammad al-Samarqandī. *CAJ* 12 (4).
- Deny, J. (1957) Un soyurgical de Timouride Šāhruḥ en écriture ouigoure. *JA* 245.
- Eckmann, J. (1966) *Chagatay Manual*. Bloomington.
- Elias, N. & E. D. Ross (1898) *A History of the Moghuls of Central Asia: The Tarikh-i-Rashidi of Mirza Muhammad Haidar, Dughlāt*. Repr. Delhi, 1986.
- Esin, E. (1970) The Turkish Baḳši and the Painter Muḥammad Siyāh Qalam. *Acta Orientalia* 32.
- Gandjei, T. (1964) Note on the Colophon of the «Laṭāfat-nāma» in Uighur Characters from the Kabul Museum. *Annali (Istituto Universitario Orientale di Napoli), Nuova Serie* 14 (1).
- Gandjei, T. (1970) Was Muḥammad al-Samarqandī a Polyglot Poet? *Türk Dili ve Edebiyatı Dergisi* 18.
- Grigor'ev (1978) *Григорьев А. П.* «Монгольская дипломатика XIII-XV вв. (чингизидские жалованные грамоты)». Ленинград.
- Grigor'ev (1981) *Григорьев А. П.* «Официальный язык Золотой Орды XIII-XIV вв. «Тюркологический сборник 1977». Москва.
- Grigor'ev (2006) *Григорьев А. П.* «Сборник ханских ярлыков русским митрополитам: Историко-лингвистический анализ золотоордынских документов». С.-Петербург.
- Hofman, H. F. (1969) *Turkish Literature: A Bio-bibliographical Survey, Section III, Part I: Authors*, 6 vols. Utrecht.
- Iusupova (2006) *Юсупова Д. Ю.* «Жизнь и труды Хондамира». Ташкент.
- Mair, V. (1992) Perso-Turkic *Bakhshi* = Mandarin *Po-shih*: Learned Doctor. *JTS* 16.

- Melioranskii, P. (1906) *Мелиоранский П.* Документ уйгурского письма султана Омар-Шейха. «Записки восточного отделения Имп. Русского археологического общества». Том 16.
- Minorsky, V. (1956) Pūr-i Bahā's 'Mongol' ode (Mongolica 2). *BSOAS* 18(2).
- Nadeliaev, V. M. et al. (1969) *Наделяев В. М., Насилов Д. М., Тенишев Э. Р., Щербак А. М.* «Древнетюркский словарь». Ленинград.
- Poppe, N. (1940) *Поппе Н. Н.* Карасакпайская надпись Тимура. «Труды Отдела Востока Государственного Эрмитажа». Том 2.
- Poppe, N. (1965) A Middle Turkic Text of the Apostles' Creed. *Monumenta Serica* 24.
- Radlov, V. (1889) *Радлов В.* Ярлыки Токтамышы и Темир-Кутлуга. «Записки восточного отделения Имп. Русского археологического общества». Том 3. Вып. 1.
- Sertkaya, A. G. (2004) Semerkandlı Şeyh-zade Abdürrezzâk Bahşî'nın Ali Şir Nevayî'ye Anadolu'da Yazdığı Nazireler. *Ali Şir Nevayî'nin 560. Doğum, 500. Ölüm Yılı Dönümleri Anma Toplantısı bildirileri*. Ankara.
- Sertkaya, O. F. (1973) Osmanlı Şairlerinin Çağatayca Şiirleri III: Uygur Harfleri ile Yazılmış Bazı Manzum Parçalar I. *Türk Dili ve Edebiyatı Dergisi* 20.
- Sertkaya, O. F. (1974) Some New Documents Written in the Uigur Script in Anatolia. *CAJ* 18 (3).
- Sertkaya, O. F. (1977) *İslâmî devrenin uygur harfli eserlerine toplu bir bakış*. Bochum.
- Subtelny, M. E. (1980) 'Alî Shir Navâ'î: Bakhshî and Beg. *Harvard Ukrainian Studies* 3/4 (2).
- Subtelny, M. E. (1991) The Vaqfiya of 'Alî Şir Navâ'î as Apologia. *JTS* 15.
- Subtelny, M. E. (2007) *Timurids in Transition: Turko-Persian Politics and Acculturation in Medieval Iran*. Leiden · Boston. [書評: 久保一之 『西南アジア研究』 71 (2009).]
- Sultan, I. (1985) *Иззат Султан* (Прозанч. Текст пер. А. Зырин. Стихи С. Иванов) «Книга признаний Навои: Жизнь и творчество великого поэта со слов его самого и современников». Ташкент.
- Sultanov, T. I. (1982) *Султанов Т. И.* «Кочевые племена Приаралья в XV-XVII вв.» Москва.
- Sulton, I. (1973) *Иззат Султон* «Навойнинг калб дафтари: Буюк шоирнинг хаёти билан ижоди ўзининг ва замондошларининг тасвирида». Асарлар (4 томлик), 3-чи том. Тошкент. [初版 1969 年刊]
- Togan, A. Z. V. (1962) The Composition of the History of the Mongols by Rashid al-Dīn. *CAJ* 7 (2).
- Togan, Z. V. (tr. S. Tonguç) (1963) *On the Miniatures in Istanbul Libraries*. Istanbul.
- 安藤志朗 (1985) ティムール朝 Shāh Rukh 麾下の中核 amīr 『東洋史研究』 43 (4).
- 井谷鋼造 (2011) オスマン朝のハーカーンたち 『西南アジア研究』 74.
- 伊原弘・梅村坦 (1997) 『〈世界の歴史〉 7 宋と中央ユーラシア』 中央公論社.
- ウラヂミルツォフ (外務省調査部訳) (1941) 『蒙古社会制度史』 (復刻本) 原書房, 1980.
- F. C. エントレス & A. シンメル (橋本和彦訳) (1997) 『数は何を語るのか』 翔泳社.
- 小田壽典 (2010) 『仏説天地八陽神呪経一巻 トルコ語訳の研究 研究編』 法蔵館.
- 小野 浩 (2000) メフメト II 世の「ヤルリグ」——バシケントの戦いに関する一史料——『京都橘女子大学研究紀要』 26.

- 小野 浩 (2002) テムル朝アブー・サイドのアク・コユンル朝ウズン・ハサン宛てウイグル文字テュルク語書簡文書簡介『ポスト・モンゴル期におけるアジア諸帝国に関する総合的研究』平成11年度～13年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究成果報告書.
- 小野 浩 (2006) テムル朝シャルフのウイグル文字テュルク語文書再読『中央アジアにおけるムスリム・コミュニティの成立と変容に関する歴史的研究』平成14年度～17年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (A) (1) 研究成果報告書 (研究代表者: 堀川徹).
- 小野 浩 (2010) ギヤースッディーン・ナッカーシュのティムール朝遣明使節行記録 全訳・註解——ハーフィズィ・アブルー『バイシングルの歴史精華』から——窪田順平編『ユーラシア中央域の歴史構図——13-15世紀の東西——』総合地球環境学研究所.
- 加藤和秀 (1999) 『ティムール朝成立史の研究』北海道大学図書刊行会.
- 川口琢司 (2007) 『ティムール帝国支配層の研究』北海道大学出版会.
- 久保一之 (1988) 16世紀初頭のヘラート——二つの新興王朝の支配——『史林』71 (1).
- 久保一之 (1990) ミール・アリー・シールの学芸保護について『西南アジア研究』32.
- 久保一之 (1997a) ビナーイーのシャイバーニー・ナーマについて『トルコ・イスラム時代中央アジア文化の総合的研究』平成6～8年度文部省科学研究費補助金 基盤研究 (A) (1) 研究成果報告書 (研究代表者: 間野英二/課題番号 06301043).
- 久保一之 (1997b) ティムール朝とその後——ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き——『〈岩波講座世界歴史〉11 中央ユーラシアの統合 (9-16世紀)』岩波書店.
- 久保一之 (2008) ナヴァーイー (ミール・アリーシール) の社会観——*Muḥbūb al-qulūb* 第1章日本語訳 (付. ローマ字転写校訂テキスト)——『京都大学文学部研究紀要』47.
- 小山皓一郎・本田実信 (1973) オグズ=カガン説話 I『北方文化研究』7.
- 佐口 透 (1970) 『〈東西文明の交流〉4 モンゴル帝国と西洋』平凡社.
- 菅原 睦 (2001) チャガタイ文学とイラン的伝統『総合文化研究』(東京外国語大学) 5.
- 菅原 睦 (2007) 『ウイグル文字本『聖者伝』の研究 I. 序論と転写テキスト』(The Studies of Eurasian Languages Series 11) 神戸市看護大学.
- 杉山正明・北川誠一 (1997) 『〈世界の歴史〉9 大モンゴルの時代』中央公論社.
- ドーソン (佐口透訳) 『モンゴル帝国史』全6巻 (平凡社東洋文庫).
- 濱田正美 (1983) 肅州城東関帝廟華寺——マールウ本ウイグル訳金光明最勝王経奥書注釈一則——小野和子編『明清時代の政治と社会』京都大学人文科学研究所.
- 濱田正美 (1984) トルコ『〈アジア歴史研究入門〉4 内陸アジア・西アジア』同朋舎.
- 本田実信 (1991) 『モンゴル時代史研究』東京大学出版会.
- 間野英二 (2001) 『バーブルとその時代 (バーブル・ナーマの研究IV 研究篇)』松香堂.
- 森安孝夫 (1997) 《シルクロード》のウイグル商人——ソグド商人とオルトク商人のあいだ——『〈岩波講座世界歴史〉11 中央ユーラシアの統合 (9-16世紀)』岩波書店.
- D. Iu. ユスポワ (磯貝健一訳) (1998) 16世紀中央アジア文化史の史料としてのホーンデミールの作品『西南アジア研究』49.